

兵庫県文化財調査報告書第37冊

桑原遺跡

—国鉄福知山線複線電化工事に伴う発掘調査—

1986.12

兵庫県教育委員会

桑原遺跡

—国鉄福知山線複線電化工事に伴う発掘調査—

1986.12

兵庫県教育委員会

はじめに

わたくしたちの兵庫県は、北は日本海、南は瀬戸内海に面し、内には縦豊かな山々を含め持つふるさとであります。

このような自然条件のもとで、古くから文化が開け、多くの貴重な文化財が残されております。

これらの文化遺産は、歴史を学ぶ上に、更には新しい文化を向上させるために、かかせないものであり、次代に申し送り活用を図ることが、我々の責務と考えます。

この度、国鉄福知山線（宝塚～新三出間）複線電化工事に先立って、三田市桑原所在の集落遺跡の発掘調査を、日本国有鉄道の委託を受け、兵庫県教育委員会が調査を実施いたしましたが、今日、調査の結果をとりまとめ、報告書を刊行いたしました。

この報告書が文化財保護と文化向上のため、お役にたてば幸せです。

最後に、調査にあたり、なにかとご指導、ご協力を頂いた多くの方々に、厚くお礼を申し上げます。

昭和61年12月

兵庫県教育長 井野辰男



例　　言

1. 本書は、国鉄福知山線複線電化工事に伴う、桑原遺跡発掘調査報告書である。
2. 桑原遺跡は兵庫県三田市桑原に位置する。
3. 本報告は、昭和59年3月、同年5月～7月にかけて兵庫県教育委員会が実施した桑原遺跡の発掘調査報告書である。
4. 発掘調査は、日本国有鉄道（以下「国鉄」と略す）の福知山線複線電化工事に伴い実施された。
5. 発掘調査の主体は、兵庫県教育委員会で、調査の担当は、吉田　昇・岡田章一・深井明比古である。
6. 遺構の写真撮影は調査員が分担して行い、遺物の撮影については森　昭氏の手を煩わした。
7. 本書に使用した製図については、和田早芳子・原香代美が行った。
8. 金属製品の保存処理は、加古千恵子の指導の下に、原が行った。
9. 本書で使用したレベル高は、標高144.784m からのものである。
10. 本書の執筆については、下記の方々の協力を得た。記して感謝の意を表したい。
大村敬通・岡崎正雄・高島信之・高橋　学・宮本郁雄・吉謙雅仁

本文目次

はじめに

例　言

本文目次

挿図目次

図版目次

第1章 調査にいたる契機と経過

第1節 遺跡の発見	(深井)	1
第2節 調査の体制	(深井)	1
第3節 確認調査	(岡田)	4
第4節 全面調査	(深井)	5
第5節 整理作業	(和田)	6

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境	(深井)	7
第2節 歴史的環境	(吉田)	8

第3章 遺構と遺物

第1節 縄文時代の遺物	(深井)	11
第2節 弥生時代末および古墳時代の遺構と遺物	(吉田・深井)	11
第3節 奈良時代の遺構と遺物	(吉田・深井)	41
第4節 中世の遺構と遺物	(岡田・深井)	45

第4章 ま　と　め

(吉田・深井)

挿 図 目 次

- | | |
|-----------------------|-----------------------|
| 第1図 調査区設定図 | 第22図 掘立柱建物跡1 出土石製品 |
| 第2図 周辺遺跡分布図 | 第23図 土壌1 |
| 第3図 繩文土器 | 第24図 土壌1 出土遺物 |
| 第4図 造構全体図 | 第25図 2区包含層 出土遺物 |
| 第5図 竪穴住居跡1 | 第26図 3区包含層 出土鉄製品・石製品 |
| 第6図 竪穴住居跡1 出土遺物(1) | 第27図 4~6区包含層 出土遺物 |
| 第7図 竪穴住居跡1 出土遺物(2) | 第28図 5区土壌・譜 |
| 第8図 竪穴住居跡1 出土遺物(3) | 第29図 土壌2 出土遺物(1) |
| 第9図 竪穴住居跡1 出土遺物(4) | 第30図 土壌2 出土遺物(2)• |
| 第10図 竪穴住居跡1 出土石製品 | 第31図 土壌2 出土石製品 |
| 第11図 竪穴住居跡2 | 第32図 5区包含層 出土石製品 |
| 第12図 竪穴住居跡2 出土遺物(1) | 第33図 5区柱穴 出土遺物 |
| 第13図 竪穴住居跡2 出土遺物(2) | 第34図 溝1・土壌3 出土遺物 |
| 第14図 竪穴住居跡2 出土遺物(3) | 第35図 土壌4 出土遺物 |
| 第15図 竪穴住居跡2 出土鉄製品・石製品 | 第36図 掘立柱建物跡2 |
| 第16図 竪穴住居跡3 | 第37図 土壌5・3~5区包含層 出土遺物 |
| 第17図 竪穴住居跡3 出土遺物 | 第38図 5区包含層 出土遺物 |
| 第18図 竪穴住居跡3 出土鉄製品 | 第39図 2・4区包含層 出土遺物 |
| 第19図 竪穴住居跡3 出土石製品 | 第40図 土壌6 出土遺物 |
| 第20図 掘立柱建物跡1 | 第41図 4・6区包含層 出土遺物 |
| 第21図 掘立柱建物跡1 出土遺物 | 第42図 5区包含層 出土遺物 |

図版目次

- 図版1 遺跡 1. 遺跡遠景（西方より） 2. 調査地点航空写真
- 図版2 遺跡 1. 5区中世遺構（南から） 2. 3・4区奈良時代遺構（西から）
- 図版3 遺跡 1. 穴住居跡2 全景（東から） 2. 穴住居跡2 断面（西から）
- 図版4 遺跡 1. 土壙2・3 全景（南から） 2. 土壙2 土器出土状態
- 図版5 遺跡 1. 土壙2 土師器128 2. 穴住居跡3 須恵器76
3. 穴住居跡3 土師器71 4. 穴住居跡3 土師器70
- 図版6 遺跡 1. 穴住居跡3 全景（南から） 2. 挖立柱建物跡1 全景（南から）
- 図版7 遺跡 1. 穴住居跡1 全景（北から） 2. 穴住居跡1 鉢・砾石出土状態
- 図版8 遺跡 1. 調査後全景（東から） 2. 調査後全景（西から）
- 図版9 繩文土器(1) 穴住居跡1・2
- 図版10 土師器 穴住居跡1
- 図版11 土師器 穴住居跡1
- 図版12 土師器 穴住居跡2・3 5区柱穴
- 図版13 須恵器 1. 穴住居跡2・3 2. 4~6区 包含層
- 図版14 土師器 土壙1 および2区包含層
- 図版15 土師器 2区包含層
- 図版16 土師器 土壙2
- 図版17 土師器 土壙2
- 図版18 土師器 土壙2・4
- 図版19 土師器 奈良時代の土師器
- 図版20 須恵器 1. 2・4・6区包含層 2. 杯蓋（各地区）
- 図版21 須恵器 1. 杯身（各地区） 2. 高杯・器台（各地区）
- 図版22 石製品 延石
- 図版23 石製品・鉄製品 石製品・鉄製品
- 図版24 土師器・土製品 土師器・土製品

第1章 調査にいたる契機と経過

第1節 遺跡の発見

桑原遺跡は国鉄福知山線複線電化工事に先立ち、昭和55年3月に遺跡分布調査された際に発見された。分布調査は道場駅から三田駅に向かって行われた。

沿線の山塊には近年の踏査により、多くの古墳が発見されていることから、古墳を築造した集団のムラの存在が当然予想された。沿線には武庫川の氾濫源に位置している所や、草地が多く、充分な踏査はできなかった。しかし、福知山線と旧有馬鉄道との分岐点付近で若干の土器の散布が認められたことから、遺跡確認調査の必要が生じた。

第2節 調査の体制

調査主体 兵庫県教育委員会 社会教育・文化財課

昭和58年度 確認調査の体制

(調査事務)	課長 西澤 良之 参事 大西 章夫 副課長 森崎 理一 〃 馬田 力 埋蔵文化財調査係長 横本 誠一 技術職員 大平 茂 課長補佐兼管理係長 福永 康造 主任 八家 均 事務職員 杉本 恵子
(調査員)	主任 吉田 昇 技術職員 囲田 章一 作業員 北本 一男・田中 実・小西 清・福井 詳治 岸下 節子・畠中千代子・畠中きみ江・大勢 弥生 中島 清子・大北よし江・前中ともゑ・大垣すみゑ 北本あや子・小谷 幸子・古家みさを・塚本 敏子 今北 裕子

運転員 岸本 勉

昭和59年度 全面調査の体制

(調査事務) 課長 西澤 良之
参事 大西 章夫
副課長 森崎 理一
△ 馬田 力
埋蔵文化財係長 横本 誠一
技術職員 大平 茂
管理係長 小西 清
主査 坂本 豊明
事務職員 杉本 恵子
(調査員) 主任 吉田 昇
技術職員 深井明比古
作業員 北本 一男・田中 実・小西 清・福井 詳治
岸下 節子・畠末千代子・畠末きみ江・大勢 弥生
中島 清子・大北よし江・前中ともゑ・大垣すみゑ
北本あや子・小谷 幸子・古家みさを・塚本 敏子
今北 裕子
運転員 岸本 勉

昭和60年度 整理の体制

(整理事務) 課長 北村 幸久
参事 森崎 理一
副課長 黒田賢一郎
課長補佐 和田 富男
埋蔵文化財調査係長 横本 誠一
技術職員 加古千恵子
△ 森内 秀造
△ 渡辺 昇
管理係長 小西 清
主査 八家 均
△ 坂本 豊明

事務職員 松本 豊彦
(整理担当) 主任 吉田 昇
技術職員 岡田 章一
〃 深井明比古
補助員 和田早芳子・原 香代美・木村 淑子・井川 佳子
松田 恵・松本 睦・堀川 英子・八木 和子
住本 広子・山内 康雅・柏木 三幸・上島 彩子

昭和61年度 整理作業

(整理事務) 課長 北村 幸久
参事 森崎 理一
副課長 黒田賢一郎
〃 奥平 勝
課長補佐兼埋蔵文化財調査係長 大村 敬通
主査 小川 良太
主任 加古千恵子
技術職員 渡辺 昇
(整理担当) 主査 吉田 昇
主任 岡田 章一
技術職員 深井明比古
補助員 和田早芳子・原 香代美・金山 恵子・住本 広子
伊藤 昌子・長原みゆき

第3節 確認調査

当該地点では、先に行われた分布調査の結果、土師器片、須恵器片が採集され、当該地区に遺跡の存在することが予想されていた。昭和59年度に、当該地区を東西に縦貫する国鉄福知山線について複線電化工事が実施されることになったため、兵庫県教育委員会では日本国有鉄道大阪工事局と協議の結果、工事対象地域のうち、遺跡の存在が予想される約500m²について、昭和59年3月12日から13日に至る2日間にわたり確認調査を実施した。

調査地域は、鉄道線路に沿う長さ80m幅5mにわたる狭長な地城であり、路線敷の隣接地という安全上の制約もあって、それらの点を考慮した結果、調査対象地の北端部・中央部・南端部にそれぞれ長さ15m、幅1mのトレンチを設定して、調査を実施し、北から順に第1トレンチ、第2トレンチ、第3トレンチと命名した。

調査の結果、層序は、各トレンチの間で若干の相違があるものの、基本的には、第I層黒褐色シルト層（現水田耕土）、第II層明黄褐色シルト層（現水田底土）、第III層黃灰色シルト層（旧水田耕土及び底土）、第IV層暗茶褐色遺物包含層、第V層灰黃褐色土層（地山層）の順に堆積することが確認された。

第IV層遺物包含層中からは、極く少量の中世の須恵器・土師器を除くと、奈良時代に属する、須恵器・土師器及び、多量の庄内期に属する壺・甕等が出土した。

又、第IV層遺物包含層を除去した地山面上面では、柱穴と思われるピット群、住居跡の一部と考えられる土壤、及び溝状遺構が検出され、少なくとも第IV層暗茶褐色土遺物包含層上面を遺構面とする古墳時代前期から奈良時代に至る遺構が調査区全体にわたって存在することが確認された。

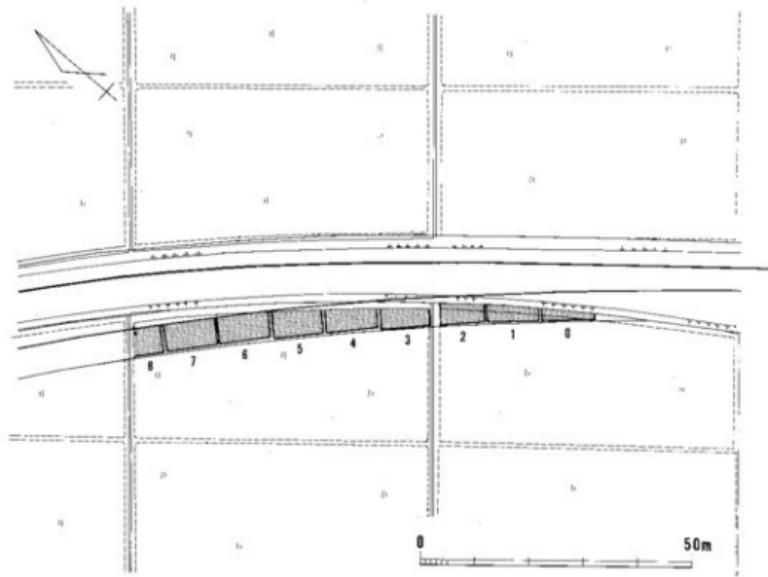
これらの調査結果から県教育委員会では当該遺跡に対する、全面調査の必要性を認め、再度国鉄大阪工事局と協議を行った結果、調査対象地約400m²について全面調査の実施を決定した。しかし、確認調査の実施期間が、3月12～13日という年度末にあたっている為、全面調査は次年度、改めて調査体制を整えて行うこととなり、遺構検出状況の写真撮影、及び断面図作成を終了したのち埋め戻しを行い確認調査を終了した。

第4節 全面調査

確認調査の結果に基づき、線路拡幅部分に南東方向から、北西方向に向い、0～8区までの調査区を設定した。各区の長さは10m単位とし、延長85m、幅6m平均で発掘作業にかかった。

発掘調査は5月初旬の田植え時期から梅雨まで至り、付近一帯の水位が上がったうえ、用水路ぎわであることもかさなり、水との闘いが続いた。まず掘削については、小型ユンボにて表土掘削を行い、5・6区4層上面にて中世と考えられる柱穴、土壤、溝を検出した。次いで、サブトレレンチ断面観察の結果、4・9・10層をベースとして奈良時代の掘立柱建物跡や溝、土壤などの遺構を検出した。その後、最下層の遺構面である明黄褐色土中砂層まで掘削し、弥生時代末～古墳時代にかけての竪穴住居跡や溝、土壤などの遺構を検出した。さらに下層についてトレレンチにて遺構・遺物がないことを確認した。

また当地は線路拡幅部分と言うこともあり、調査幅がとれなかったことから、住居跡等の遺構の全容がつかめなかつたことや、東西方向の遺跡範囲の限界まで追求することができなかつたが、予想を上回る成果をあげ、無事に発掘調査を終了した。



第1図 調査区設定図

第5節 整理作業

整理作業は、昭和60年・61年度の2年に渡り行った。

土器洗浄については、魚住分館で行い、それ以降は兵庫県埋蔵文化財調査事務所で行った。

昭和60年 7月1日～8月1日	ネーミング（遺跡番号8402）。コンテナ数60箱。
8月1日～9月7日	接合。
10月29日～昭和61年4月18日	造構単位に接合。
昭和61年3月5日～5月16日	実測。
4月18日～6月4日	復元。
7月5日	報告書作成の打合せ。
9月8日～9月17日	遺物（土師器）トレース。
9月19日～9月24日	造構トレース・レイアウト。
9月29日～10月6日	鉄器処理（錆おとし）。
9月25日・10月13・14日	遺物写真撮影。
10月15日～10月18日	遺物（須恵器）トレース。
10月21日～10月22日	鉄・石製品実測、トレース。
10月20・21・24日	遺物レイアウト。
11月	報告書作成後の遺物・造構等の整理。

以上のように整理を行った。遺物は魚住分館、造構図、写真等は兵庫県埋蔵文化財調査事務所にて保管されている。活用されたい。



鉄器処理（錆おとし）作業

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

三田市は兵庫県の南東部にあり、阪神地区から六甲山地を隔て約20kmの山間部に位置する。周辺の市町としては、東は宝塚市、川辺郡猪名川町、南は神戸市北区、西は美嚢郡吉川町、加東郡東条町、北は多紀郡今田町、丹南町、篠山町に接している。

当市は面積211.9km²、人口は4.1万人である。また、市内の西部丘陵地帯では人口13万人の北摂三田ニュータウンの建設が進められ、分譲が開始されている。

交通としては三田盆地を国鉄福知山線が走り、大阪・宝塚方面や篠山・福知山から豊岡などの山陰地方の足となっている。昭和61年11月には三田北摂ニュータウンの玄関口となる新三田駅～宝塚駅間に複線電化された。神戸電鉄は神戸新聞地から神戸市北区を抜け、三田に至っている。また道路網としては国道175号線が市域の南東から北に向かい、道路の主幹をなしている。また、中国経貫自動車道が市域の南端を東西方向に走り、近畿自動車道舞鶴線が中央部を南北方向に貫き、山陰方面への分岐点になる日も間近である。これら交通の便も良くなり、阪神間のベッドタウンとして、田園文化都市を目指し、開発計画が進められている。

昭和63年には交通機関の開通を記念し、北摂・丹波の祭典(ホロンピア'88)が開催される。

市域は500～700mの山々が連なる北・東部と、200m前後の山々がそびえるかたわら丘陵地帯が広がる南・西部と、河川沿いの低地に武庫川が市域の北西から、南東方向に貫流している。支流としては相野川、内神川、青野川、有馬川、有野川などがある。これらの河川沿いの谷や盆地一帯には、肥沃な土地が形成され、三田米など多くの農作物をうみだしている。

桑原遺跡は三田盆地東端部の武庫川沖積地に位置し、東経135°14'41"、北緯35°52'54"付近にある。遺跡の南を流れる武庫川は有野川などの小河川と合流し、達来峡谷にいたるが、多くの支流を従えた武庫川が、三田盆地南東端で堰止められた状態になることがあり、水流が淀むことから、武庫川本流により形成された微高地の一部はこの淀み等による堆積で、その起伏は均一化され、現在では微地形分析等で判明できる程度である。当遺跡はその埋没した微高地に位置していると考えられる。武庫川の沖積地にはこのような表面には現れない微高地が数多く存在するものと考えられ、それぞれに遺跡が存在することが予想される。

第2節 歴史的環境

兵庫県の北摂と言えば、三田と答える程、北摂の中核都市化が進んでいるのが三田市の現在の姿である。

近年の開発の波の大きさは、目を見張るものがあり、列挙しても、北摂・三田ニュータウン、青野ダム建設、近畿自動車道舞鶴線、更には、当遺跡の直接の契機となった、国鉄福知山線複線電化工事などがある。

このような開発の飛躍的な増大の中にあって、遺跡の発見・周知化も例外でなく増大しており、昨年や1カ月前のこと、古い知識と言っても過言ではない状態である。上記の開発地域が、主に丘陵や山地であるのに対して、平野部での遺跡発見の主人公は、圃場整備事業に伴う分布調査・発掘調査である。

三田盆地は、中央部を流れる武庫川を中心に、流域平野と右岸・左岸に位置する丘陵から形成されており、丘陵上の古墳群に関しては、密度の粗い状態で、ある程度は知られていたが、流域平野の遺跡は、内神下井沢遺跡や天神遺跡が知られていたにすぎない。

今日では、三田市域の遺跡と言えば、縄文時代の数時期を除いて、先土器時代後半頃から、近世・近代に至るまで連綿と、遺構・遺物の存在が知られている。

桑原遺跡は、福知山線複線電化工事に先立ち、発見・調査の実施された遺跡であるが、当初は、周囲の丘陵上に古墳の存在が知られるものの、流域平野には、遺跡のない空白地帯として考えられていた。

第2図の周辺遺跡について、発見・調査の契機なども含めて、簡単な記述をする。

桑原遺跡の北側丘陵（一部独立丘陵）に位置する桑原古墳群は、桑原東古墳群・桑原西古墳群を包括した呼称であり、20m未満の後期円墳群であるが、詳細はよく判らない。

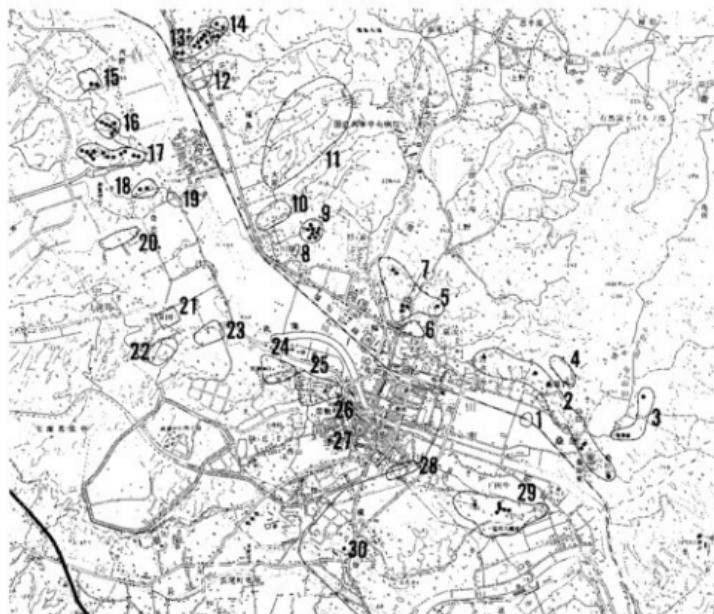
三輪宮ノ越遺跡は、三田青磁で有名な、三輪明神窟跡の南に位置し、弥生時代中期から中世に及ぶ集落遺跡であり、市道建設に伴って調査が実施された。

川除古墳群は、学校建設に伴って調査された古墳群で、5世紀末期～6世紀初頭の木棺が検出されている。南に広がる川除遺跡は、平安時代の散布地である。

福島長町遺跡は、圃場整備に伴って調査されており、弥生時代中期の住居跡等が見つかっている。福島古墳群は、現在分布調査を実施し、全体の把握をしつつある。

東野上古墳群は、6世紀末期の横穴式石室墳であり、青龍寺裏山古墳群は、埴敷きの古墳として著名である。

中西山・西山・奈良山古墳群は、北摂ニュータウン建設に伴って調査されており、中西山では、武庫川右岸唯一の横穴式石室墳が、西山では、冠帽を副葬した前方後円墳や、下層の弥生時代方形周溝墓が見つかっている。



- | | | | | |
|------------|--------------|------------|--------------|---------------|
| 1. 桑原塗跡 | 2. 桑原古墳群 | 3. 山田古墳群 | 4. 桑原城跡 | 5. 三輪古墳群 |
| 6. 三輪宮越跡 | 7. 三輪明神室跡 | 8. 川除遺跡 | 9. 川除古墳群 | 10. 大原城跡 |
| 11. 福島古墳群 | 12. 福島長町遺跡 | 13. 東野上古墳群 | 14. 青龍寺裏山古墳群 | 15. 中西山古墳群 |
| 16. 西山古墳群 | 17. 奈良山古墳群 | 18. 貴志古墳群 | 19. 貴志・下所遺跡 | 20. 五良谷古墳群 |
| 21. 稲田城居館跡 | 22. 下深田大山遺跡 | 23. 下深田遺跡 | 24. 天神遺跡 | 25. 三田陣屋・車瀬城跡 |
| 26. 古城遺跡 | 27. 金心寺廃寺推定地 | 28. 対中遺跡 | 29. 下田中古墳群 | 30. 墓山古墳 |

第2図 周辺遺跡分布図 (S-1 : 37,500)

下所・稻田居館跡・下深田の各遺跡は、圃場整備に伴う調査で判明した遺跡であり、下所からは鎌倉時代の木棺墓が、印を伴って見つかっている。

五良谷古墳群は、木棺を主体部とする後期の古墳群である。

旧三田城（車瀬城）からは、城跡以外にも弥生時代中期の集落遺跡を含んでおり、古城遺跡と呼ばれている。城跡南地域には、白鳳期の寺院跡である、金心寺廃寺が埋没しており、最近少しづつ実態が判明しつつある。

市街地の中心部にあっても例外でなく、遺跡は見つかっている。対中遺跡であり、幹線道路及び再開発に伴って、縄文時代・弥生時代・奈良～鎌倉時代の複合集落跡であったことが判明した。

(参考文献)

- 兵庫県教育委員会「特別地域埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表」第3集 昭和44年
兵庫県教育委員会「特別地域埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表」第2分冊 昭和48年
兵庫県教育委員会「三田市・青野ダム建設に伴う埋蔵文化財調査概報」(1)・(2)・(3) 昭和53・54・57年
兵庫県教育委員会「北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅱ」 昭和58年
高島信之他「三田考古」1～7 昭和56～58年
三田市教育委員会「北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅰ」 昭和58年
中谷一正「三田市史」下巻 昭和40年
神戸新聞社会部「祖先のあしあと」Ⅰ・Ⅳ 昭和33・36年
佐原 真「伊丹市史」第1巻 昭和46年
石野博信「绳文時代の兵庫」 昭和54年
前田昭二「ふるきと三田」第10集 昭和55年
橋本誠一・松下 勝「日本の古代遺跡」兵庫南部 昭和59年
兵庫県立歴史博物館「発掘がかたる兵庫の歴史」 昭和61年

第3章 遺構と遺物

第1節 繩文時代の遺物

桑原遺跡の縄文時代の遺物としては、3区9層ベース直上の9層灰色砂層から縄文土器が1点のみ出土した。

土器は、波状口縁をなす深鉢形土器の小片である。外面は波頂部の直下に径8mmほどの刺突があり、波頂部方向から胴部にかけてやや弧状をえがく3条の沈線がみられる。その他、外面の文様については小片のため不明である。口縁上端部は波頂部を挟んでそれぞれ径1mmの浅い刺突がみられる。

胎土中には1~2mmのチャートや石英の砂粒が多くみられ、焼成の影響で色調はだいだい色を呈する。全体的に表面が剥落したような状態で、ローリングを受けたものかも知れない。

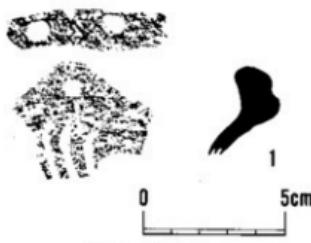
この縄文土器の特徴である波状口縁をなし、波頂部を中心とした刺突文や沈線文は波頂部外面中央に飾られた渦巻文や窓枠状の文様を簡略されたものと考えられ、縄文時代中期末の北白川C式4期であろう。兵庫県下でも中期末の資料としては、竜野市片吹遺跡、姫路市丁・柳ヶ瀬遺跡でまとまって出土している。

いずれにせよこの1片の縄文土器から三田盆地南東部で縄文人の足跡を知る日も遠くならう。

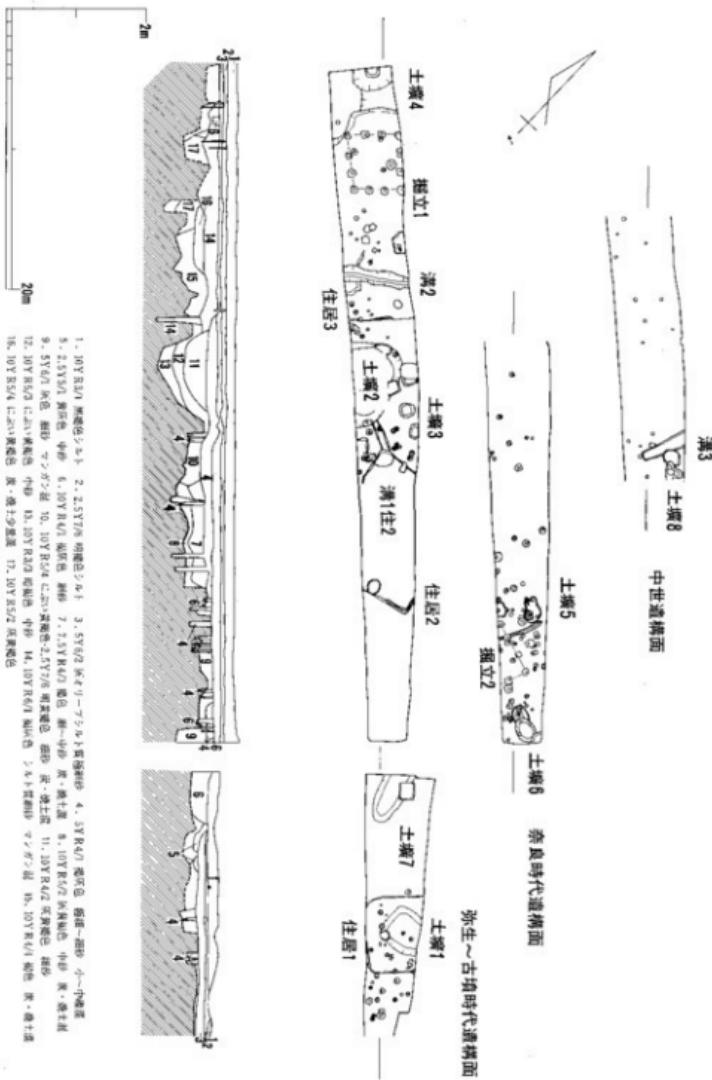
第2節 弥生時代末から古墳時代の遺構と遺物

本遺跡にて検出された遺構は3面におよび、弥生時代末から古墳時代にかけての遺構は最も下の遺構面にあたる。遺構は本遺跡を形成している、微高地の堆積物である黄色シルト質細砂層をベースにしている。土層については2区と3区を分ける水路によって大きく分かれているが、遺構が存在するレベルでは大差ないことから後世に0~2区では削平されたことが予想される。

遺構の内容としては、方形堅穴住居跡3棟、掘立柱建物跡1棟、土壤及び土壤状の掘り



第3図 縄文土器



第4図 遺構全体図

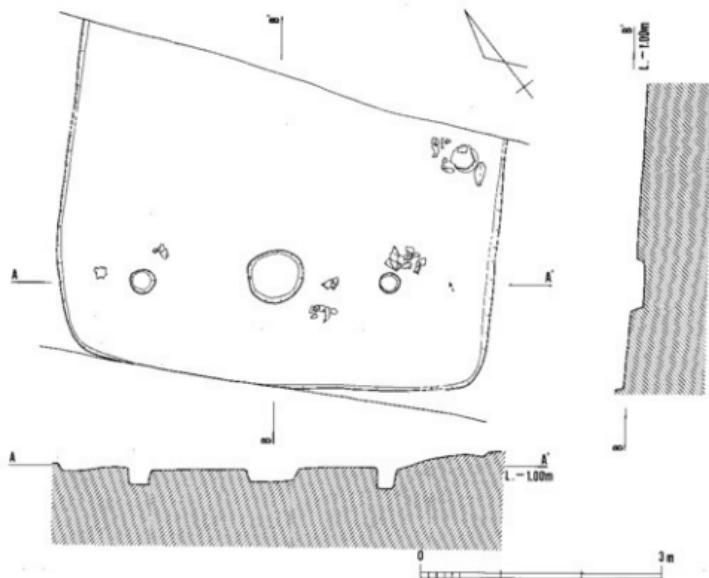
込み、溝、ピットなどがある。なにぶん調査範囲が線路拡幅内に限られたため、竪穴住居についてはその全容を知りうるものは全くなかった。またこの時期の遺構面の南東端ではベースが大きく落ち込んでいく状態がうかがえたが、湧水が激しく完掘は不可能となった。北西方向については掘立柱建物跡や落ち込みがあり、この状況がまだ続くものと考えられるが、ボーリングによる調査の結果、北西方向では湿地を形成している青灰色シルト層が続いていることが判明した。これらのことと裏付ける資料として、三田市が市道拡幅による確認調査を昭和59年7月実施したが、遺構、遺物は検出できなかった。

竪穴住居跡 1

竪穴住居跡 1 は調査区の東端の 1 区西方に位置する。確認調査のトレンチはこの住居跡の南側をかすめるかたちで東西方向にいれられたものであることが判明した。

遺構（第 5 図・図版 7）

土層堆積は、耕土・床土を剥いだ後、奈良時代や古墳時代の土層を包含する、灰オーラブ色シルト質極細砂層が堆積し、その下面で検出されたものである。しかし、細かに土層



第5図 竪穴住居跡 1

堆積を検討した結果、検出面にて若干新しい時期の土壌が切っていることが判った。この土壌は一部住居跡床面よりさらに掘り込まれているところから、住居北中央に土壌等が存在したか否かについては不明である。

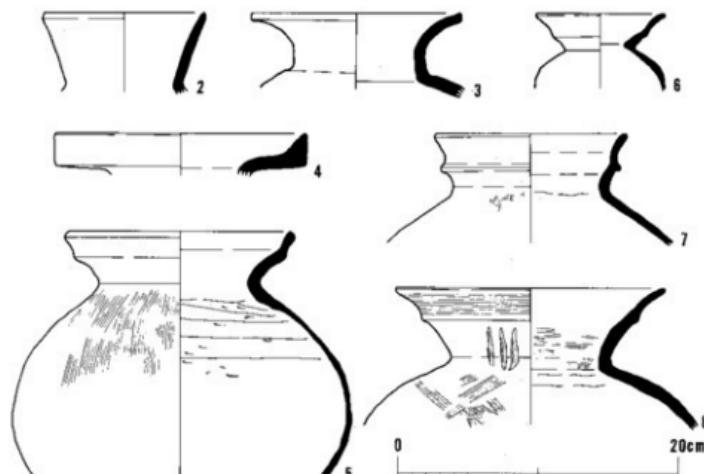
調査区が狭く、平面形についてはその全容を知りうることはできなかったが、かろうじて南及び西方隅を押さえることができた。東西5.4m南北4.2m以上の方形竪穴住居跡で、東西の柱は2本検出し、その間は2.9mで南の柱は深さ30cm、北は25cmであることが判明してきた。またその中間には径約70cm深さ20cmの土壌を知りうることも判った。

住居跡内の遺物出土状況は床面にほぼ密着した状態で壺・甕・鉢・高杯などが出で、いずれも完形に近いもののが多かった(第6図)。また床面直上では砂岩質の大型の砥石が確認調査時と全面調査時に各1点づつ出土している(第10図)。

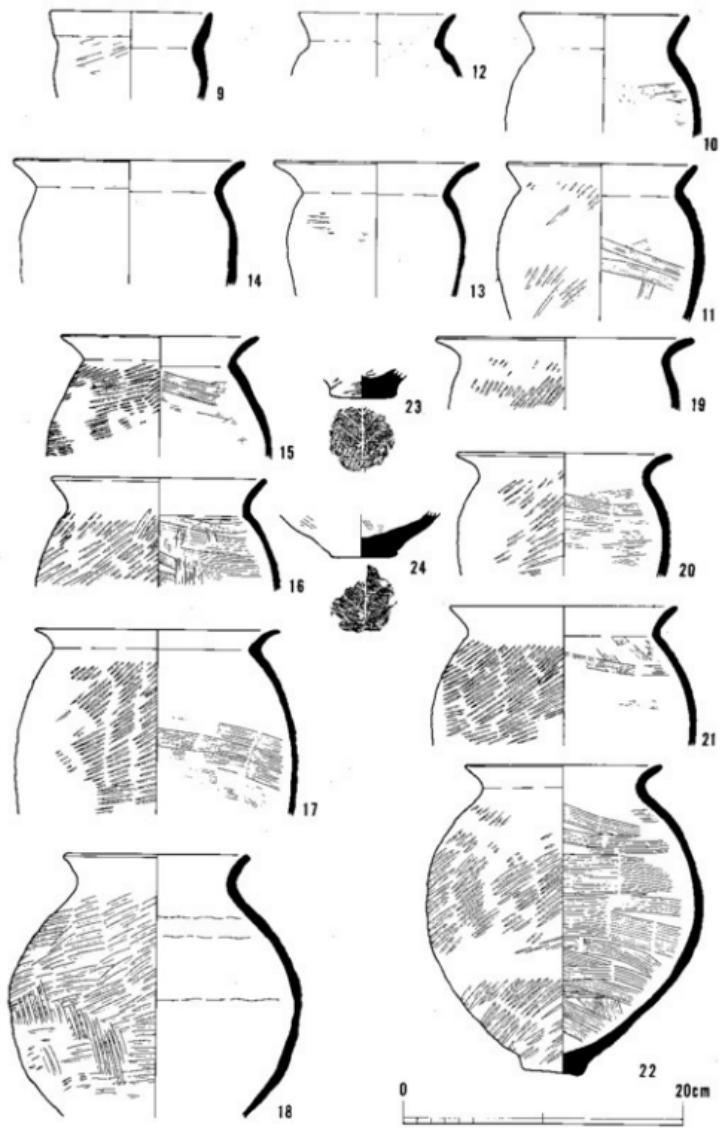
遺物 (第6~10図・図版9~11・22)

竪穴住居跡1から出土した遺物は壺・甕・高杯・器台・鉢・砥石がある。

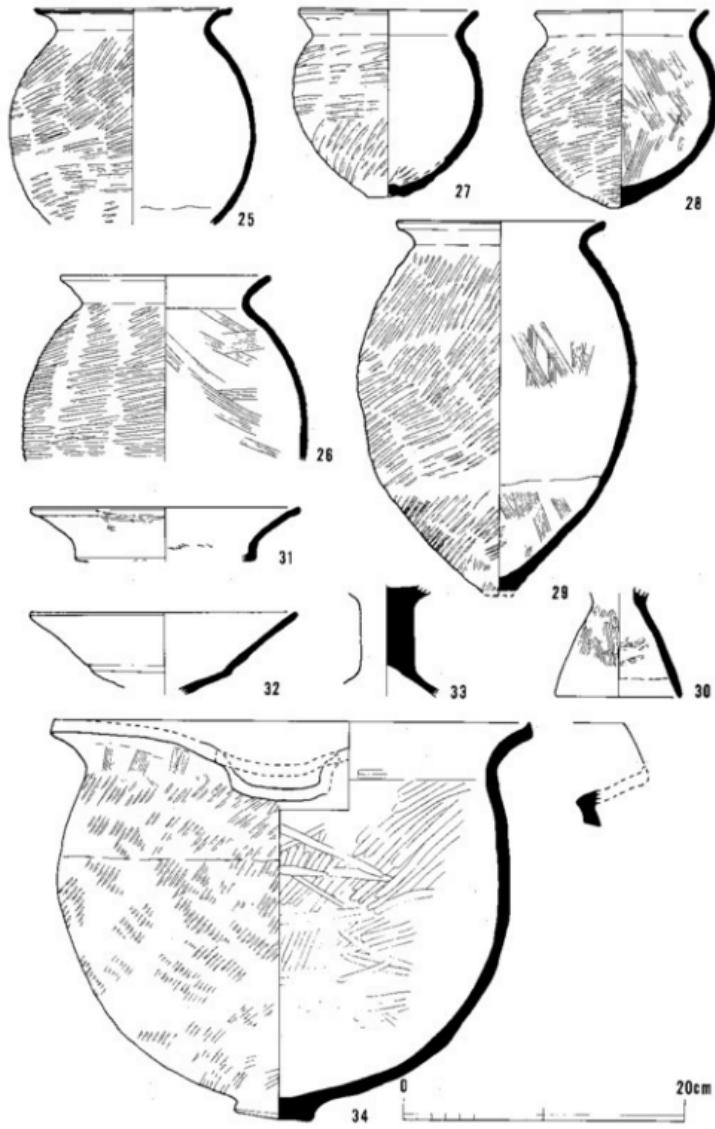
壺(2)は頭部からやや開きぎみに外傾するもので胴部はほぼ球形になるものであろう。(3)は口縁部は外傾しながら大きく開くもの、(4)は口縁が大きく開いたのち、上方に直立する。(5~8・35・37~39)はいわゆる二重口縁をもつものである。この中でも(5)はなだらかな複合部をもち胴部がやや張るタイプのもので、外面にハケ目、内面はケズリ調整がみられる。(7)は複合部が垂れ下がるところから、山陰系統のものであろう。(8)は頭部に縱方向のヘラ状工具による記号が施されており、口縁外面には細かな



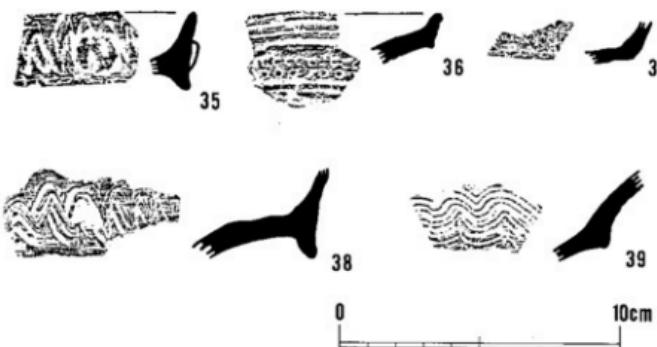
第6図 竪穴住居跡1 出土遺物(1)



第7図 墓穴住居跡 1 出土遺物 (2)



第8図 積穴住居跡 1 出土遺物 (3)



第9図 豊穴住居跡 1 出土遺物 (4)

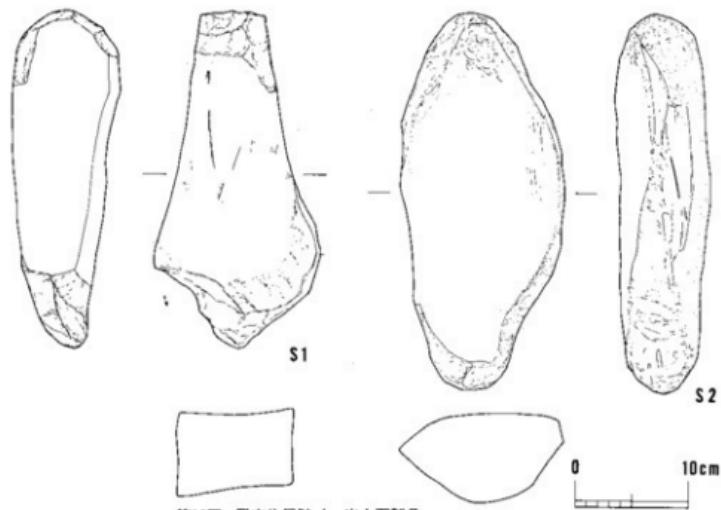
横方向のハケかクシ状工具による文様がみとめられる。(35)は粗い櫛描き波状文の上に円形付文を施す。その他(37~39)は口縁外面に櫛描き波状文を施している。

甕は土器の中でも多数を占めており、復元完形品も4点含まれている。甕における外面調整は(10・12・14)のように無文のものもあるものの、その他はすべて畿内第V様式の伝統を引く叩き目調整をもつものである。内面の調整については、判るものではハケ目によるものが多く、僅かに(12)のみにケズリ手法がうかがわれるのみである。口縁形態からみれば、(9~12)は外傾ぎみに若干聞くもので、(13~29)は大きく外反するタイプである。その中でも(25・26・29)では口縁外面を押さええることから、つまみあげられた状態にある。器形からみると、ほぼ球形に近いものがほとんどで、(29)のみ長胴化しているのみである。この甕には成形痕が残され、分割技法をうかがわせる叩き目の方向の相違が明瞭に確認された。また(22・27・28)についても同様のことが言えよう。

また甕底部と考えられる(23・24)底面に文葉痕がみとめられた。

高杯は3点出土している。(31)は口縁にかけて大きく外反するもので、外面には横方向のヘラミガキがみとめられる。(32)はほぼ直線的に外傾しているもので、内外面共、横方向のヘラミガキが見受けられる。(33)は高杯の脚中央部分である。調整については内外面共ナデ手法が看手できる中実脚部である。

器台と考えられる破片は2点ある。(36)は口縁部分の小片で、端部外面に3本の擬凹線がはしり、下方には竹管の連続刺突文が2条あり、また下には擬凹線が続くものである。(30)は器台の脚部と考えられ、やや外反しながら端部にいたるもので、外面調整は縦方



第10図 穂穴住居跡 1 出土石製品

向のヘラミガキが顕著で、内面では横方向の細かなヘラミガキがみうけられた。

鉢は(34) 1点のみで、口径33.6cm器高28cmと大型で、片口鉢である。口縁端面が押えられ、上方に直立ぎみになっており、胴部にかけてはほぼ球形に近く、小さな底部にとりつく。外面には粗い叩き目手法を残しているが、ナデにて消された部分が多くみられる。また内面は斜め及び横方向のヘラミガキが顕著に認められる。

砥石は2点、いずれも住居跡床面に密着した状態で出土したものである。(S 1) は砂岩製で長さ30.0cm最大巾14.8cm重量3820g をはかり断面が長方形を呈する大型の砥石である。両端方向に粗削りによる敲打痕があるが、その後、4面共、研ぎ面として使用され、それぞれの面が若干の凹面を呈している。(S 2) は長さ33.5cm、巾14.6cm、重量5130g をはかる大型の砥石である。全体的に磨かれてはいるが、図示した面が特に研がれ、右側面においても若干磨かれた面がうかがえるものである、このいずれの砥石もきめの細かい砂岩で、住居跡に密着していたことから、当時の生活を復元する上でも重要な遺物になろう。

住居跡1からは以上の遺物の出土をみたが土器の特徴などから、弥生時代末～古墳時代初頭、いわゆる庄内式並行期にあてはまるものと考えられるが、細かな叩き目を特徴とする庄内式そのものは出土していない。

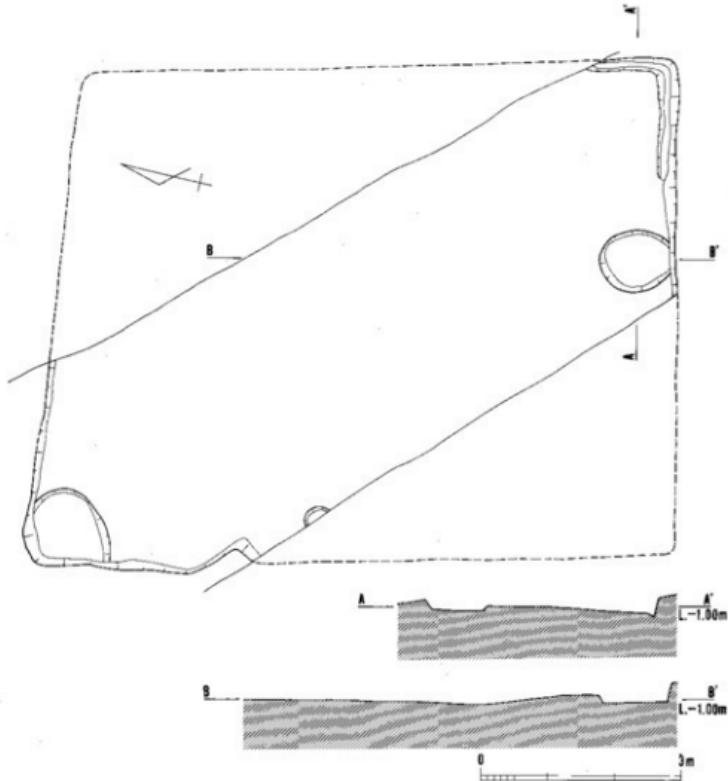
竪穴住居跡 2

この住居跡は調査地区のほぼ中央にあたる4~5区にまたがっており、黄色シルト質細砂層をベースとしている。

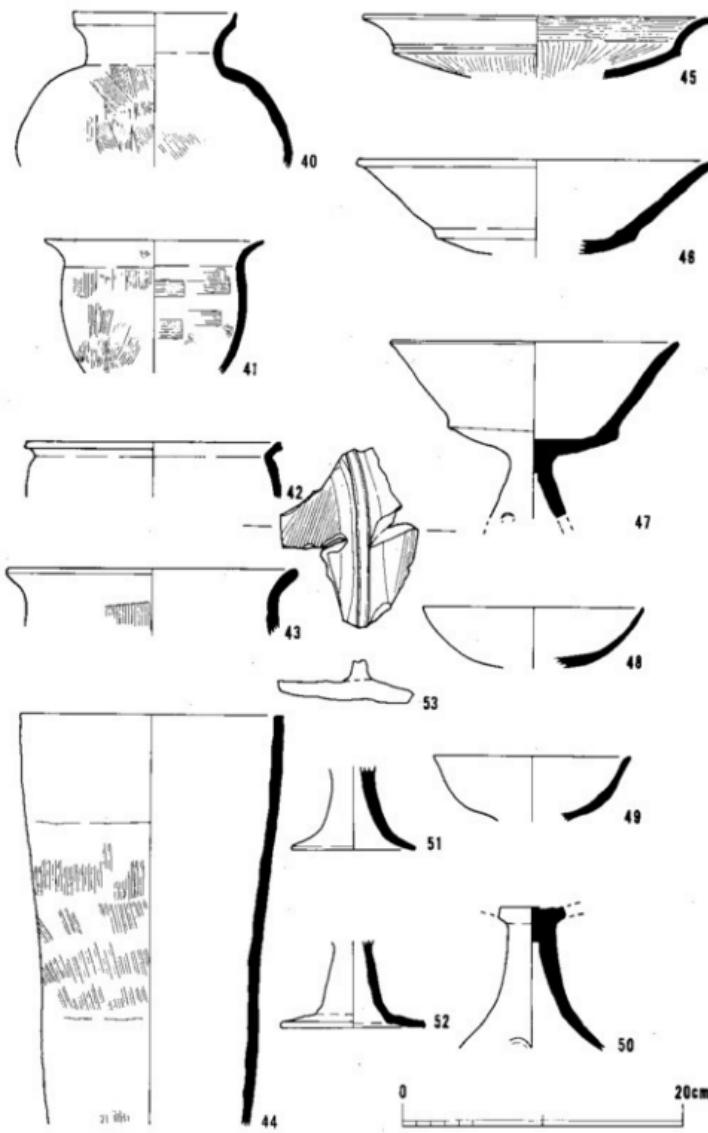
遺構（第11図・図版3）

住居跡がトレンチの方向に対して斜めであったことから、当初は別個の遺構と考えていたが、焼土や炭がある面が続くことから、床面であることが判明した。

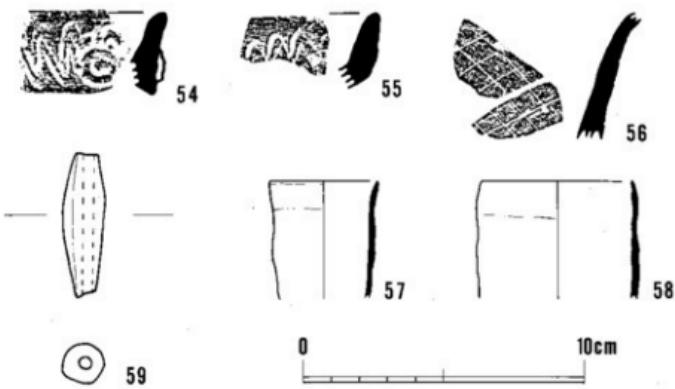
規模は推定であるが南北5.5m、東西4.5m、深さ15cmの方形竪穴住居跡と考えられる。住居跡内の堆積土には上層の褐色細～中砂層炭・焼土混じり、下層の灰黄褐色中砂層炭・焼土混じりがある。



第11図 竪穴住居跡 2



第12図 積穴住居跡 2 出土遺物 (1)



第13図 壁穴住居跡 2 出土遺物 (2)

住居跡の南東隅では巾15~20cm、深さ7cmの周壁溝が検出されたが、北西隅では検出されなかった。住居跡内の構造の配置は北西隅に110×100cm、深さ15cmの円形土壙があり、南辺中央部に110×90cm、深さ13cmの円形土壙が存在したが、柱穴は検出できなかった。また床面の傾きはほとんどないが、多少の凹凸は存在する。

遺物 (第12~15図・図版9・12・13・23・24)

壁穴住居跡2から出土した遺物には、壺・甕・高杯・鉢・甕・製塙土器・土鍤・須恵器・鉄製品・石製紡錘車がある。これらの遺物はいずれも床面直上ではなく、住居跡内の埋土から出土したものである。

壺(40)は口縁から胴部最大径が残る半完形品で、頸部が短く、口縁端部が1cm程直立するものである。調整は内外面共縦~斜め方向のハケで行われている。壺については僅かである。(54)は口縁外面にクシによる波状文に竹管を押した円形付紋が付き、(55)は同様にクシによる波状文がみられるが、円形付紋はみあたらない。

甕は3点出土しており、(41)は小型ながら口縁が大きく外反するものであり、外面調整はタテ方向のハケ目があり、内面は横方向のハケ目が見受けられる。(42)は頸部から短く開き口縁端部が押さえられたことによって若干凹んでいる。(43)は胴部から大きく外反するもので、外面に縦方向のハケ目が見受けられる。(56)は甕か鉢の胴部外面に細いヘラ状工具によって格子状の文様が描かれた小片の土器である。

高杯は土器の中でも最も多くの点数が出土しており、杯部に屈曲がみられるものとみられないものに分けられる。(45)は杯上半に屈曲がみられ内外面共丁寧にヘラミガキが加

えられたものである。(46・47)は杯部下半に屈曲部をもち杯部の深さがあるもので穿孔された脚部をもつ。(48・49)は屈曲をもたないもので杯部の径が10cm強と小型のものである。脚部では(50)がやや大型で穿孔され(51・52)は小型で径10cm程度のものである。鉢として(44)があげられる。口径18.8cm長さ29.5cmの長胴化したもので、緩やかな曲線を描いている。胴部外面には叩き目を残すがナデ手法にて消されている所が多い。完形品でないため形態が不明であるが、いわゆる山陰系の把手付き甌に類似するものかも知れないが、一般的な長胴化する甌の可能性がある。

(53)は平らな面にややカーブした凸帯を貼り付けた甌で、外面に粗いハケ目調整がうかがえる。

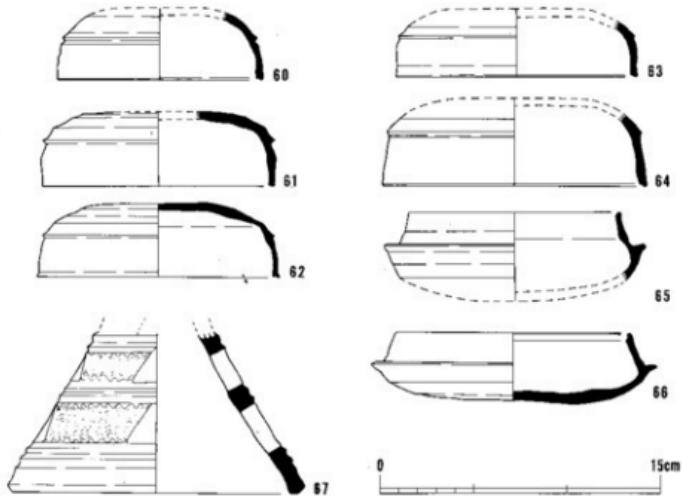
製塙土器 (第13図・図版24)

竪穴住居跡2からは10片近くの製塙土器が出土したが、図示し得るものは僅かに2点のみであった。(57)は口径4cm、残存高4.3cmと小型のもので、器壁も2mmと薄く、手づくねの土器である。(58)は口径5.4cm、残存高4.2cm、(57)に比べて大型であるが器壁は同様の2mm程度である。三田市内からは下所遺跡から出土例があり、内陸地の製塙遺跡の一つが追加されることになる。

須恵器 (第14図・図版13)

須恵器は杯身、杯蓋、器台脚部の8点が出土しており、全て破片である。

杯蓋は口径11~14cmの範囲内であり、12cm前後のものが多い。



第14図 竪穴住居跡2 出土遺物(3)

(61) は口縁部と天井部の境界の稜も明瞭であり、天井部の大部分はヘラ削りが施されおり、平らである。

杯身の口径も12cm前後であり、たちあがりも内傾気味であるが比較的高い。

共に口縁端部の内面に弱い段を持ち、底部は浅い。

(67) は器台の脚部であり、低くつまみ出した凸帯によって構成された段が、残存部で二段見られる。文様帶には櫛描き波状文を巡らせ、三角形の透しを縦に直線的に配している。

土製品 (第13図・図版24)

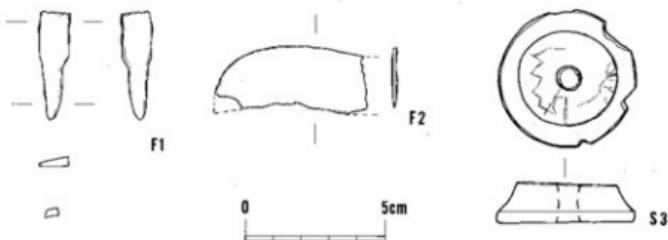
土製品としてはこの遺構から(59)の土錘が1点のみ出土した。全長5.2cm、最大幅1.2cm、径3.8mmで重量10.0gをはかる。

鉄製品 (第15図・図版23)

鉄製品については2点出土している。(F1)は残存長3.7cmをもつもので、左面左側縁が尖っている。持ち手の部分は四角いものである。(F2)は残存長5.3cm、厚さ1.5mmの鉄鎌である。刀部は鏽化が進行しており、保存状態は良くなかったが、珍しい鉄器である。

石製品 (第15図・図版23)

4区V層から出土した紡錘車(S3)は滑石製で、径は5.0cm、厚さ1.5cm、重量50.5gの規模をもち、穿孔径は6mmにおよぶ。上端部に鋸歯文状の刻みがみえるが製作過程の段階で文様の線刻は中止されたものと考えられる。裏面は文様がなく、各部分はよく研磨されている。残存状態の良好な資料である。



第15図 墓穴住居跡 2 出土鉄製品・石製品

豎穴住居跡 3

豎穴住居跡 3 は調査区西方の 6 区付近に位置し、黄色シルト質細砂層をベースとしている。

遺構 (第16図・図版 5・6)

住居跡と考えられる東壁とその周壁溝を検出した。しかし西壁と考えられる立ち上がりはなかったが中央付近と考えられる所から焼土が検出され、ベース面にはやはり炭・焼土が多く、豎穴住居跡と判断した。

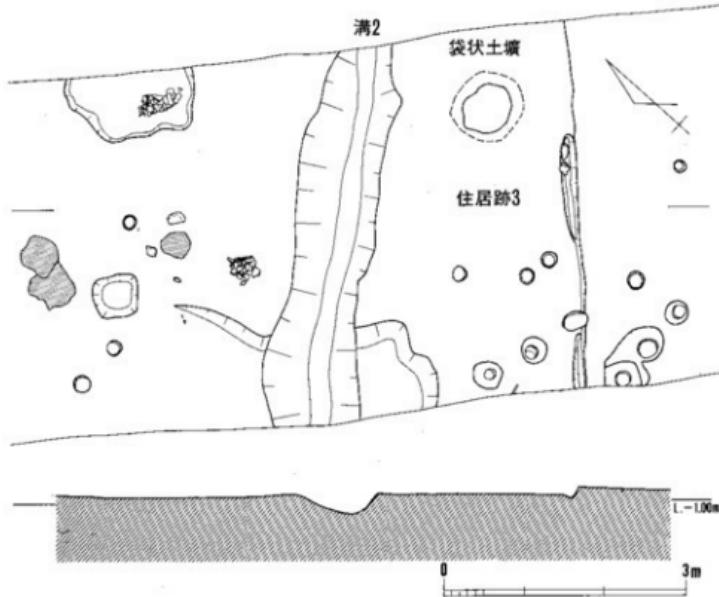
床面には柱穴の他、北壁寄りに浅い土壌があり、甕(70)が出土している。その他、袋状土壌や庄内式併行期と考えられる南北方向の溝が検出された。

遺物 (第17~19図・図版12・13・22~24)

土師器 (第17図・図版12)

豎穴住居跡 3 から出土した土師器には、壺・甕・高杯・懶・土鍤、須恵器では杯身・短頸壺・鉄製品、砥石がある。遺物は住居跡埋土と柱穴・土壌等から出土したものである。

壺(68)は口径が10cm程度の小型品で、直立する頸部から屈曲し大きく開く口縁をもち、端部には2条の凹線をもつもので、庄内式併行期の可能性がある。

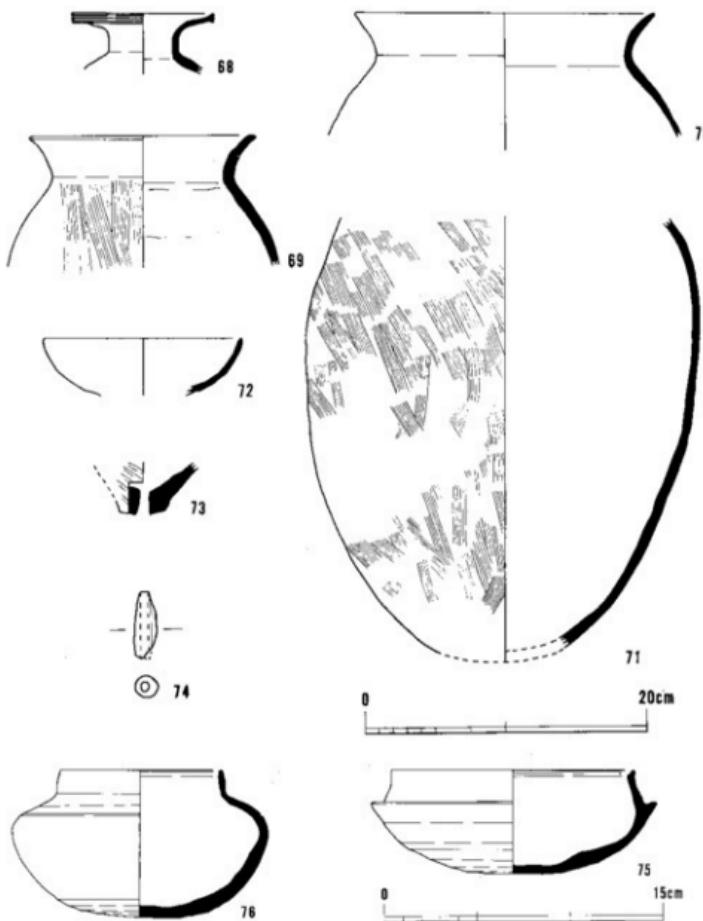


第16図 豊穴住居跡 3

甕（69・70）は脇部から口縁にかけてゆるやかに外反するもので、やや長胴化した形になるタイプであろう。（69）は外面にタテ方向のハケ目があり、頸胴部間の内面には粘土の繼ぎ目が見られる。

高杯（72）は杯部で、口径14cmをはかるが脚部を欠損している。

瓶（73）は底部中央に径0.8cmの孔を穿っており、表面に叩き目調整がうかがえる。



第17図 整穴住居跡 3 出土遺物

土製品 (第17図・図版24)

土製品としては土錘 (74) が1点出土しているのみである。この土錘は住居跡内東方の柱穴から出土したもので、一部は欠損している。長さ4.8cm、最大径1.7cm、孔径0.6cmで10.5gをはかる。

須恵器 (第17図・図版13)

住居跡3出土の須恵器は2点である。

杯身 (75) は住居跡床面付近の出土であり、口径13cm、器高5.6を測る。

口縁部はやや内傾気味にたち上り、端部内面は浅く凹んでいる。底部のヘラ削りは、全体の3分の1程度の範囲で施されており、底部は深くて丸い。

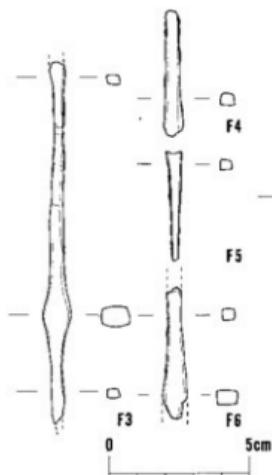
(76) は短頸壺である。住居跡壁際にて出土し、口径8.55cm、器高7.95cmを測る。

口縁部はやや内彎気味で、短く直線的に立ち、肩部上方にヘラ搔き沈線を1条巡らせている。

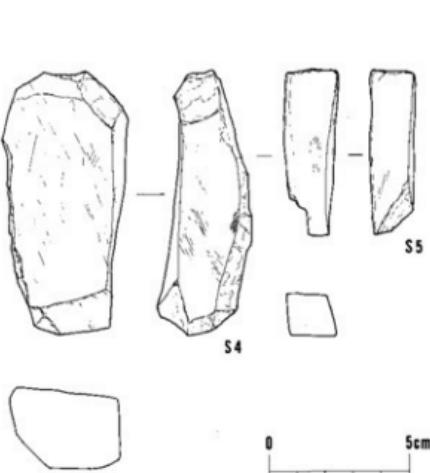
底部外面は、回転を利用したヘラ削りで仕上げ調整が施されている。

鉄器 (第18図・図版23)

鉄器は4点あり、いずれも断面が方形或は長方形を示し中ほどに若干のふくらみをもつ細長い鉄器であるが、それらの用途は不明である。(F3)は住居跡東周壁溝から出土したもので、全長13cmをはかる。(F4~6)は住居跡南東付近の黄褐色細砂層のベース層上面から出土したもので、中央付近のふくらみをもつ部分で折れており、全容を知りうることはできない。しかし形態としては(F3)同様のものになる可能性は大きい。



第18図 穹穴住居跡3 出土鉄製品



第19図 穹穴住居跡3 出土石製品

石器 (第19図・図版22)

砾石として (S 4・5) が出土した。(S 4) は両端を打ちかかれているが4面共丁寧に使用されている。(S 5) は断面が正方形に近く、4面共使用されている。いずれも砂岩製と考えられる。

以上の遺物から、庄内式併行期のと考えられるものが若干あるが、須恵器から6世紀頃の資料として扱えるものであろう。

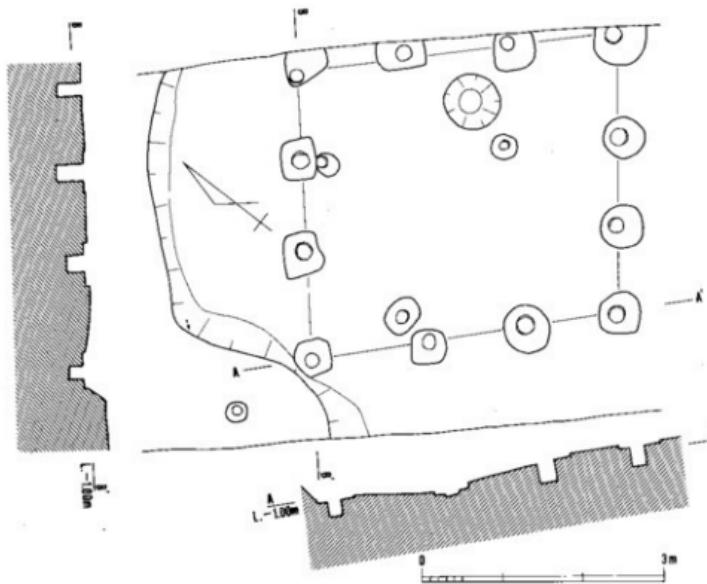
掘立柱建物跡 1

掘立柱建物跡 1 は調査区内西端付近の7区に位置する。

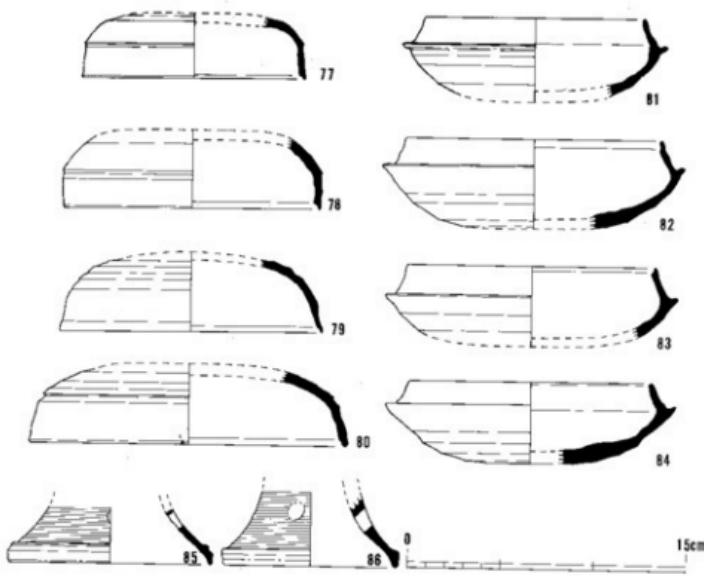
遺構 (第20図・図版6)

この掘立柱建物跡は黄褐色細砂層をベースとして掘り込まれており、17層灰黄褐色シルト質細砂が堆積していた。

規模は南北3間(3.55m)、東西3間(3.9m)で、側柱10本から成る掘立柱建物跡である。柱の間隔は南北1.88m、東西1.3mで建物全体がやや平行四辺形を呈している。柱の掘方は40~70cmの方形のものや直径60cmの円形を呈するものがある。柱痕はすべての柱穴から検出され径15~20cmのものである。



第20図 掘立柱建物跡 1



第21図 掘立柱建物跡 1 出土遺物

この他、小型の柱穴が3ヶ所とやや北寄りに径70cmの円形土壙がある。この掘立柱建物跡と切り合う建物が存在したと考えられるが、その規模についてはまったく不明である。

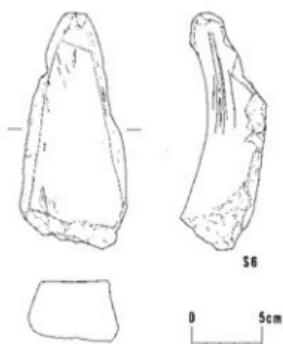
遺物 (第21・22図・図版20~22)

この掘立柱建物跡から出土し、図示できた遺物としては須恵器と砥石1点があるが、他に少量の土師器が出土している。

須恵器 (第21図・図版20・21図)

掘立柱建物跡1の検出に伴い、須恵器が出土している。

全般的には、建物跡検出面にて出土した遺物であるが、一部、調査時の浸水に伴う壁面崩壊時の遺物混入のあることを認めざるを得ない。



第22図 掘立柱建物跡 1 出土石製品

杯身（81～84）は（81）がやや小さいのを除くと、口径13cm前後とほぼ一定している。底部外面のヘラ削りも、全体の2分の1～3分の1の範囲で施されている。口縁端部内面が浅く凹むものもある。

杯蓋（77～80）には、口縁部と天井部を区分する棱が明瞭に見られ、天井部も比較的扁平なタイプ（77・78）と、全体的に丸い形態で、口縁部と天井部の区分が明瞭でないタイプ（79・80）が見られ、明確な時間差を示している。

（85・86）は短脚高杯の脚部破片であり、外面はカキ目で飾られている。

砾石（第22図・図版22）

砾石（S 6）は掘立柱建物跡のベース面で出土し、砂岩製のものである。砾石は $17.0 \times 6.4 \times 4.0$ cmの大きさで、重量は660gをはかる。砾石は表裏と両側面が使用され、特に正面では激しく凹んでいる。また側面には6条の線刻状のキズがある。



調査区遠景

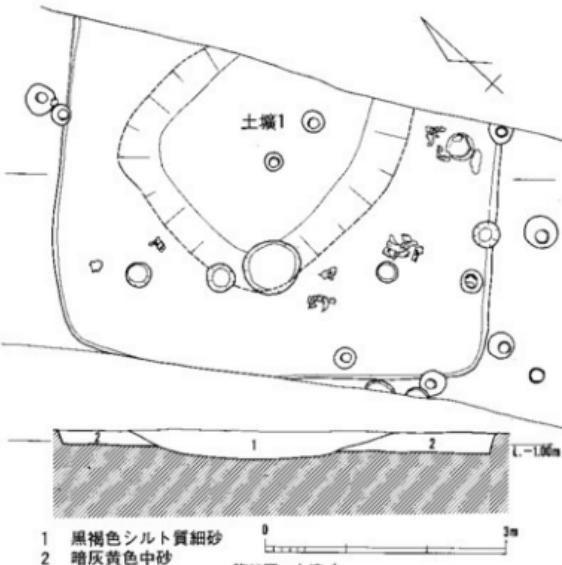
土壤 1

この土壤は調査地区東端付近の1区堅穴住居跡1を切った状態で検出された。

造構 (第23図)

土壤の堆積は灰茶色土シルト質極細砂層であり、住居跡埋土である灰オリーブ色シルト質極細砂層との見極めは困難であった。

規模は南北3.0m、東西3.35m以上の方形で、深さは約30cmあり、ゆるやかな凹



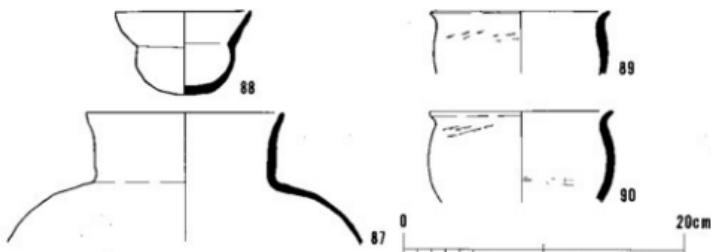
第23図 土壌 1

みを呈する。遺物の出土量も僅かであり土壤の性格も不明である。

遺物 (第24図・図版14)

土壤から出土した遺物には壺・小型丸底壺・鉢があるが、いずれも少量である。

壺(87)は頸部から口縁にかけて、ほぼ直立するもので、胸部は球形を呈するものである。小型丸底壺(88)は半球形の体部から内縫しながら外傾しているもので、(87・88)共、布留式期の遺物である。(89・90)は球形の胴部から小さく外反する口縁を有する土器である。胴部外面には僅かに叩き目の痕跡をとどめているものである。



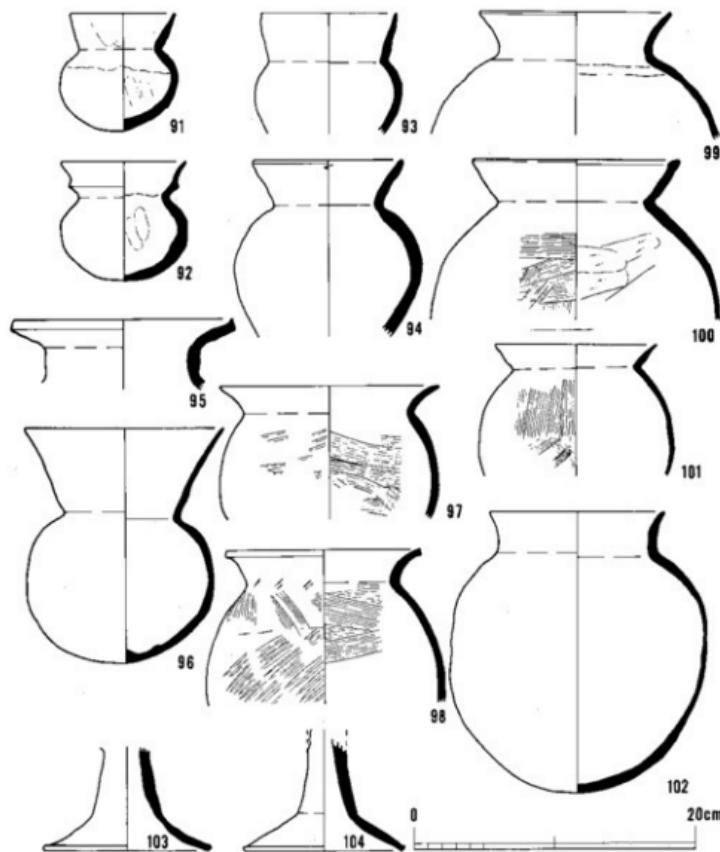
第24図 土壌 1 出土遺物

2区 土壌7及び包含層

この土壌は調査地区東方の2区に位置し、その周辺の包含層から土師器が出土した。

遺構 (第4図)

土壌の規模は東西2.1m、南北4.2m以上 の楕円形で、深さは30cmあり、ゆるやかな凹地を呈する。堆積土は黒色シルト質極細砂層であり、土壌周辺の包含層である暗灰色シルト質細砂層から、土壌内出土遺物と接合関係にある遺物が存在したことや同時期と考えられる遺物が出土したことから、この土壌7と包含層を一括報告する。



第25図 2区包含層 出土遺物

土師器（第25図・図版14・15）

遺物はすべて土師器で、壺・小型丸底壺・甕・高杯が一括して出土したものである。

(91) は小型丸底壺である。ややくずれた球形をした胴部から若干開きぎみの口縁部にいたるもので内・外面に粘土継ぎ目がうかがえる。(92) は二重口縁を呈する小型の壺である。全体に器壁は厚く、しかも均一ではなく内面には指押え痕が残る。(93・94) はやや小型の壺である。胴部最大径がやや上半に位置するもので、(93) は僅かに外傾し口縁に至るもので、(94) は開きぎみに外反している。いずれも内面にヘラケズリはみられず器壁は厚い。(95) は短く直立する頸部から大きく外傾し口縁に至る、(96) は球形の胴部から僅かに外反し、長い頸部から口縁にいたるもので、器壁は前者に比べると薄く仕上げられている。

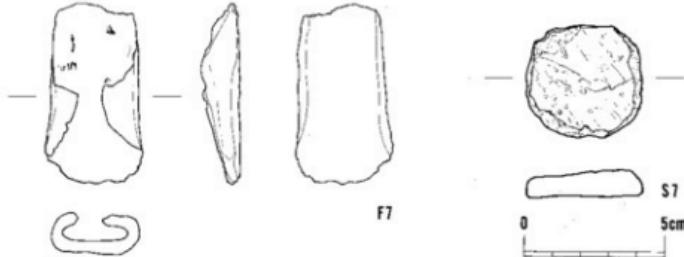
甕には(97～102)がある。(97・98) は口縁が短く外反するもので、外面には叩き目、内面にはハケ目調整痕が残るものである。(99) には球形の胴部から口縁にかけて外反しており内外面の調整は不明である。(100) は屈曲する頸部から内側しながら外傾する口縁を有し、端部は肥厚させている。外面はハケ目、内面ヘラケズリ調整された布留式土器である。(101) の器形は(100)と類似するが口縁端部の肥厚ではなく、外面にはタテ方向のハケ目がある。高杯には(103・104)がある。いずれも脚部下半にて大きく聞く屈曲部をもち、端部は押えられている。ただし杯部は出土していない。

3区 灰色細砂層

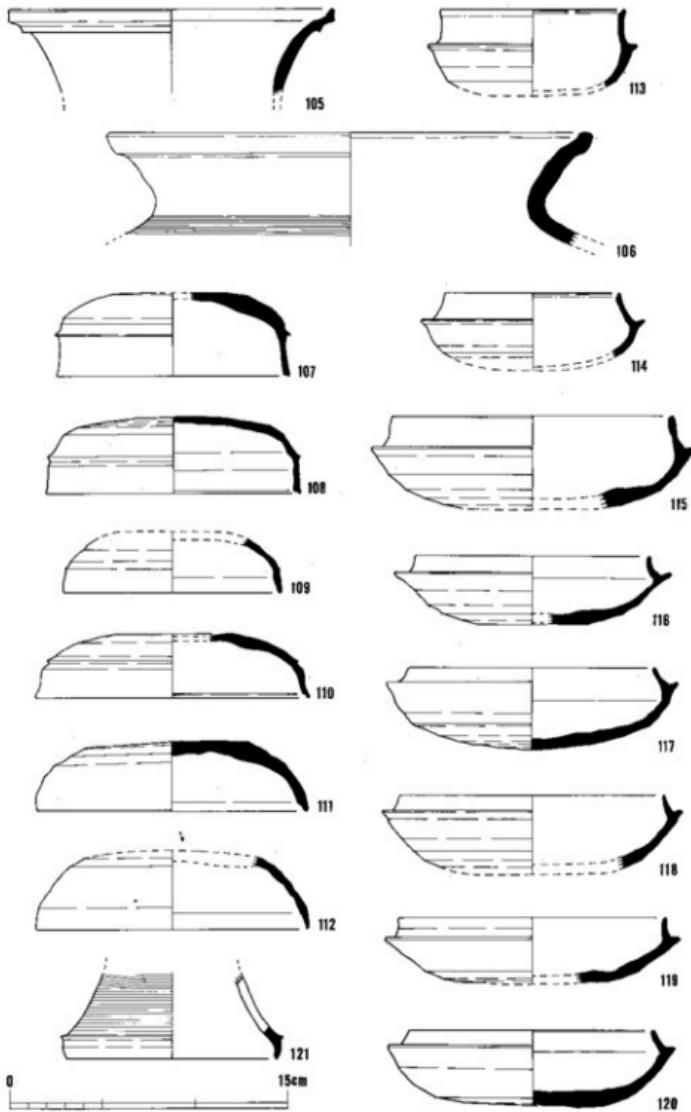
3区では弥生～古墳時代の遺構は存在せず地山直上灰色細砂層から遺物が若干出土したのみであつた。

鉄製品（第26図・図版23）

鉄器としては鉄斧(F7)がある。全長6.6cm、幅3.6cm、厚さ1.8cm重量29gをはかる小型品である。鉄斧は袋状斧の鍛造品で、折り返しが密着せず、鉄板を折り曲げたもので、簡単なつくりであり、横斧として使用されたものだろう。



第26図 3区包含層 出土鉄製品・石製品



第27図 4～6区包含層 出土遺物

石製品 (第26図・図版23)

(S 7) は3区西方の黄褐色土(地山)直上から出土したものである。直径4.2cm、最大厚0.9cm、重量26.5gで、ほぼ円形を呈する。流紋岩製の円板状石製品である。表・裏面と側面は顕著な磨製痕はみとめられないが、全体的に半磨製を受けたものと考えられる。用途についてはまったく不明な石製品である。

4~6区 包含層

須恵器 (第27図・図版13・21)

調査地全域の包含層より出土した遺物であり、ここにまとめて記述する。

須恵器に関すれば、全調査地区の中で、特に4区~6区の間に集中する傾向があり、その中でも4区が圧倒的である。

器種構成からは、杯身・蓋・高杯・壺と一般的なものばかりであるが、杯身・蓋の占める割合は非常に高い。高杯には有蓋・無蓋の両者が見られ、報告以外にも数点存在する。

杯身 (113~120) には、口径9.3cm~15.1cmまで多岐にわたっているが、大きく3期位に区分できよう。(113・114) は口径10cm前後の小型で、たちあがりが垂直あるいは、やや内彎気味に伸びるもので、たちあがりの高さも、2cm程度高い。

(115) は口径15.1cmの大型で、口縁部たちあがりも、内彎気味であるが高い。

他の杯身は、口径12cm前後で、たちあがりも1cm未満と低く、内彎の度合いも高い。底部は浅く、中央部がやや尖り気味になっている。

杯蓋 (107~112) についても、杯身同様の変遷が見られる。

(107) は天井部の大部分に、丁寧なヘラ削りを施しており、天井部はほぼ平らになっている。天井部と口縁部との境界は鋭く、明瞭な稜を形成している。

(108) は(107)に比べて、口縁部の高さが低くなっているものの、天井部と口縁部の境界は明瞭な稜となっている。他の蓋は、全体的に丸味を持っており、天井部のヘラ削りの範囲も狭くなっている。天井部と口縁部の境界では、鈍い稜を持つもの(110)もあるが、ほとんどが不明瞭な凹線か、全く認められない状態となっている。

高杯 (121) は短脚高杯の脚部破片であり、残存状態の悪いものであるが、僅かに長方形の透しが見られる、脚端部は丸くおさめられており、内彎気味に踏んばる。脚部と端部の境界は、つまみ出した凸部で明瞭な稜を形成し、体部にはカキ目を施している。

壺 (105・106) は共に口縁部の破片であり、異った形態を呈す。(105) は外反する口縁の端部が、やや直立気味に立つものであり、端部直下に凸部を1条貼付している。口縁から頸部にかけての文様は認められない。

(106) は大型の壺であり、頸部から口縁部にかけて短く外反する。口縁端部は内側に、丸く曲げられている。頸部から肩にかけて、カキ目が施されている。杯身・蓋などの関

連から考えると、(105)は古いタイプの土器類に、(106)は新しいタイプの土器類に共伴すると考えられる。

浸水などの調査時の悪条件を考えれば、古いタイプの土器類の中には、住居跡等の遺構覆土に含まれる遺物も含まれている可能性も考えられる。

土壤 2

土壤 2 は 6 区調査区の中央からやや西寄りで検出された。

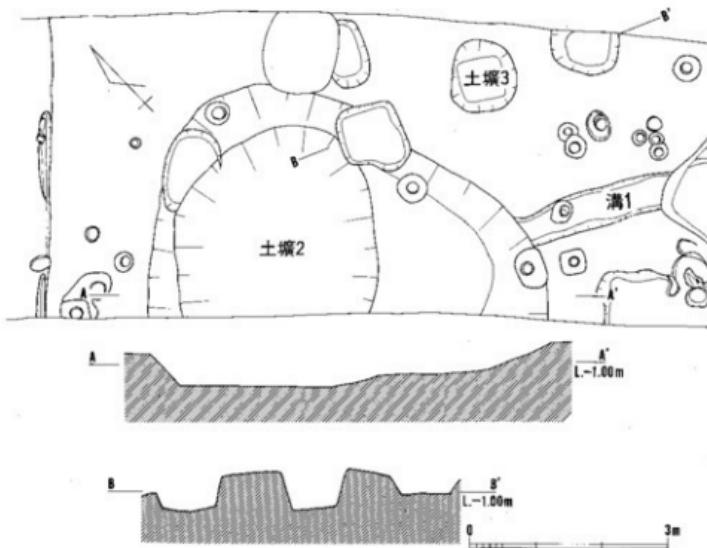
遺構 (第28図・図版4・5)

遺構は東西4.5m以上、南北6.3m以上の大きな凹地を呈し、さらにその西寄りに、東西4.3m、南北3.3mの2段目の落込みがあり、深さは68cmをかる大型の土壤である。

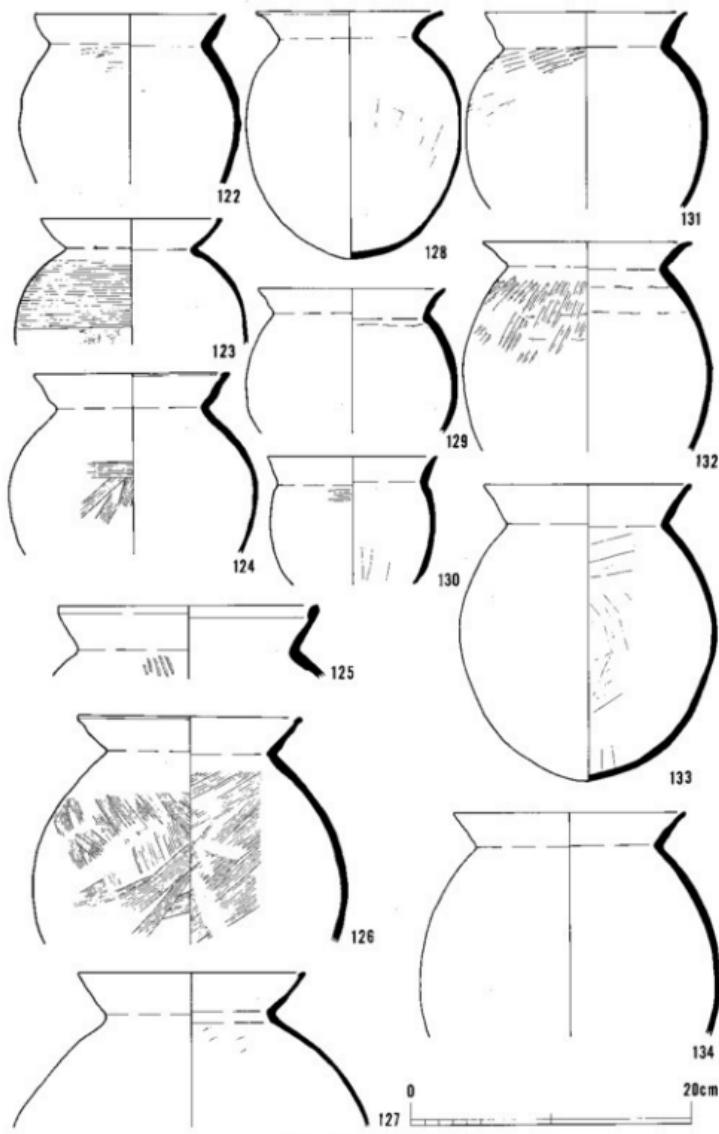
堆積は2層からなり、上層にはにぶい黄褐色中砂層が、下層には暗褐色中砂層がある。下層は湧水が激しく底面を検出することができなかったが、まだ深く掘り込まれている可能性があることから、井戸であることも考えられよう。

遺物 (第29~31・図版16~18・22)

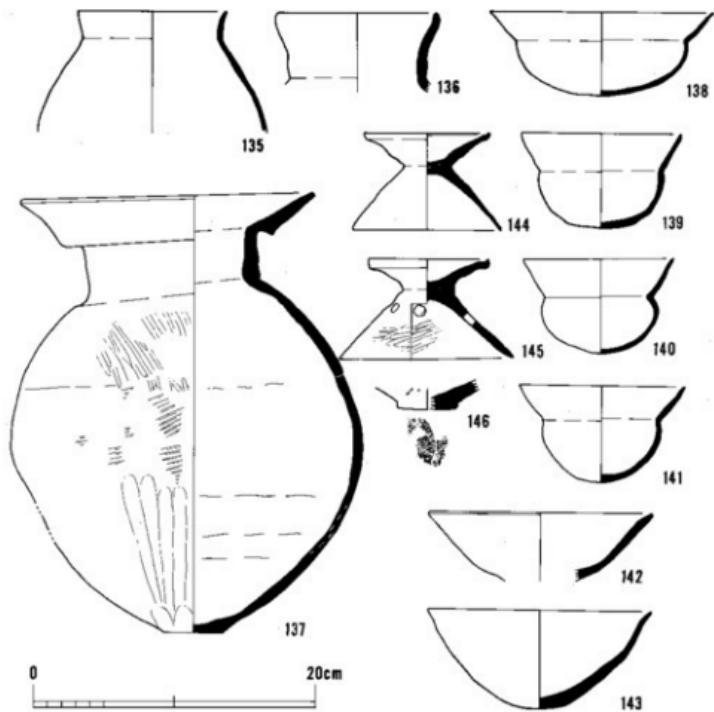
土壤 2 から出土したほとんどの遺物は、暗褐色中砂層から出土しており、遺構南東部の1



第28図 5区土壤・溝



第29図 土壙 2 出土遺物(1)

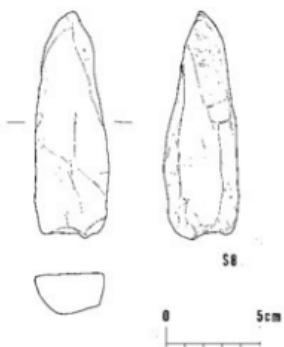


第30図 土塙2 出土遺物(2)

段目掘込み部から重なるように出土した。器種としては壺・甕・高杯・鉢・器台があり一括性の強い遺物である。

壺(135)はやや長い頸部から頭部にいたり、短く直立する口縁がつく。(136)はやや長い頸部がほぼ直立するものである。(137)は二重口縁をもつ完形土器である。頭部上半の外面には叩き目を残し、頭部下半には綫方向のヘラミガキがうかがえる。

小型丸底壺(138~141)は器高が低く口縁が大きく開くもの(138)と、開きが少ないもの(139~141)に分かれる。いずれも器壁は薄く丁寧なナデ調整が施されている。



第31図 土塙2 出土石製品

甕は出土土器中最も数多く出土している器種である。またこれらの甕は頸部から口縁部にかけて内彎しながら外傾しているもの（122～127）と頸部から口縁にかけて短く外反しているもの（128～134）とに分かれる。

(122～127) の甕は全体的に特に薄く調整されたもので、(122・124) は外面に叩き目を残し、その他は外面ハケ目の後ナデ調整がされ、その多くは胴部内面がヘラケズリされていることや、口縁端部内側が肥厚していることが特徴である。

(128～134) は口縁部が外反しているものだが前者に比べてハケ目調整が目だたなく、外面に叩き目を残す（131・132）の他、胴部内面がヘラケズリにより調整されているもの（128）がある。前者は古墳時代前期の布留式土器の特徴を備えており、後者は伝統的な甕手法を伝えるものであろう。

高杯（142）は杯部の破片である。ゆるやかに外傾しながら口縁にいたるものである。

鉢（143）は内彎しながら口縁端部で僅かに外反するもので、完形品である。

器台（144・145）は杯部が器高全体の2/3を越える。（144）は口縁端部のつまみ上げが少なく全体がナデにより調整されている。（145）は高くつまみ上げられ、脚部上方には円形透かしがあり、全体がヘラミガキで調整されているものである。

(146) は壺の底部と考えられるが、底部底面に文葉痕がみとめられた。

砥石（第31図・図版22）

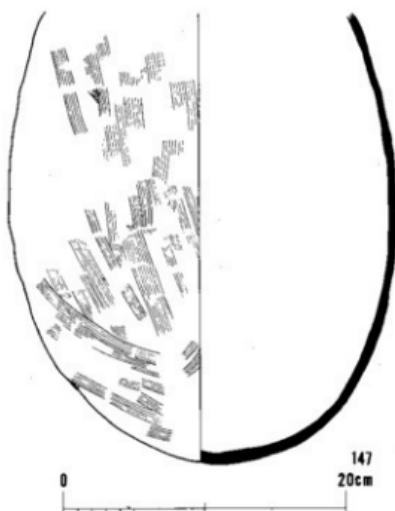
(S 8) は長さ12.3cm、幅3.9cm、重量143.5gの砥石で、両面にわたって明らかな磨面があるが、明瞭な凹みまでには至っていない。

5区 柱穴（第34図・図版12）

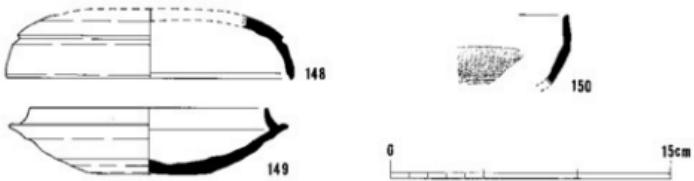
5区では東方に竪穴住居跡、西方に井戸状の落込みが検出された。竪穴住居跡付近では柱穴が検出でき、その中から



第32図 5区包含層 出土石製品



第33図 5区柱穴 出土遺物



第34図 溝1・土壌3 出土遺物

(147) が出土した。(147) は口縁部を欠く甕であり、ややたてに長い胴部が見られる。外面はタテ方向のハケ目調整がみられるが、内面は不明である。色調は赤っぽく、砂粒の多いもので古墳時代のものであろう。

石製品 (第32図・図版23)

この遺物は5区11層灰黄褐色細砂層から出土し、布留式土器が一括出土した土壌2の上端を覆う土層である。(S 9) は長さ5.5cm、幅3.3cm、厚さ1.0cmの粘板岩製で、上端の小口面を除き、他の5面は丁寧に研磨されており、部分的に擦痕が残っている。

須恵器 (第34図・図版20)

5区にて検出された、溝1及び土壌3 (第28図) にて須恵器が出土している。

溝1からは、杯蓋(148) が出土している。口径15.4cmの大型品で、口縁部と天井部が凹線によって区分されている。口縁端部内面は浅く凹む。

土壌3からの出土品は、杯身と無蓋高杯の杯部破片である。

杯身(149) は口縁部たちあがりが低く内彎し、浅い。体部は丸味を持つ。

無蓋高杯(150) は杯部の小破片であり、体部には10本の櫛描き波状文が施されている。

また、当跡出土無蓋高杯は3点であり (図版21)、他のものは、軽くつまみ出した。凸帯と凹線によって文様帶を構成している。

土壌4

造構 (第4図)

7区と8区にまたがって検出されたものである。黄褐色土の地山層を掘り込んでおり、規模は南北3.0m、東西1.6m以上、深さ50cmで、2段に凹んでいる。堆積土には若干の炭化物が混在していたものの、性格を決定づけるものは存在しなかった。

土師器 (第35図・図版18)

この土壌からの遺物は、灰黄褐色シルト質細砂層から散乱した状態で出土している。器種としては壺・甕・高杯・鉢・片口鉢・舟形鉢) が出土している。

壺(151) は口縁部が上下に拡張されたもので、外面にはヘラによる鋸歯文がみられる。

(152) は僅かに張る胴部から、ほぼ直立する口頭部をもつ小型の壺である。外面には文様

なく、また調整についても不明である。(153)は底部がほぼ丸底であり、胴部上半にて屈曲し、大きく開く口縁にいたる。外面に叩き目が若干残り、器壁は厚いもので小型丸底状の壺である。

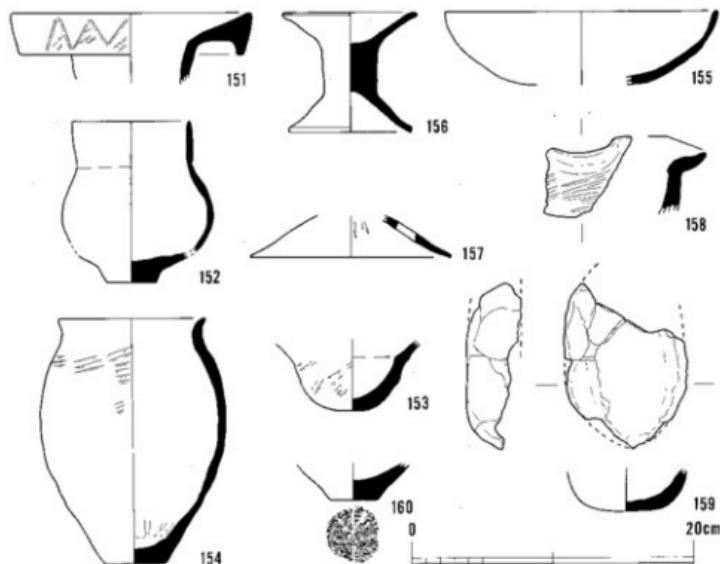
甕(154)は器高17.5cm、胴部最大径13.0cmの小型のものである。僅かに開く口縁から張りの少ない胴部にいたるスリムな器形で、胴部外面に叩き目が残存する。

高杯としては(155~157)があり、(155)は屈曲部をもたない杯部で、(156)は杯部・脚部共、直線的に開く中実のものである。(157)は大きく開く脚部破片であり、孔が穿たれている。

鉢には(158・159)があげられる。(158)は片口鉢で、表面には叩き目が残るものである。(159)は14.0×8.5cm、深さ4cm以上の舟形鉢と考えられるものである。5~6点の破片に分かれており、小型のものであるが、器壁は8mmもある。

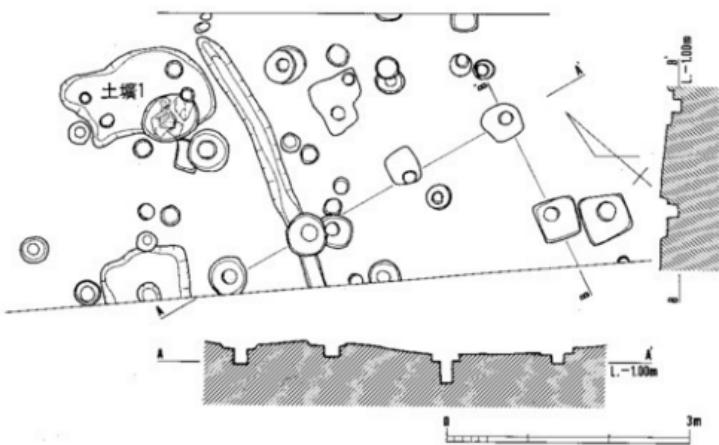
その他、底部の底面に文葉痕を残すもの(160)がある。

以上の少ない遺物ではあるが、時期を察すれば、壺・甕の形態から、弥生時代末から古墳時代初頭の庄内式併行期と考えられる。



第35図 土塚4 出土遺物

第3節 奈良時代の遺構と遺物



第36図 掘立柱建物跡 2

桑原遺跡の奈良時代の遺構と遺物は全ての調査区から検出されている。土層としてはIV～VI層が包含層、遺構内堆積土になる。

遺構 (第4・36図・図版2)

柱穴は全ての調査区から出土している。柱痕は15～20cm、掘り方は円形や方形で、25cmのものが多い。かろうじて掘立柱建物跡になる可能性があるものは1区柱穴群と2～5区の柱穴群である。また同所からは直径1.2～1.5mの土壠が散在し、3区西方では幅0.2m、深さ25cmの溝が南北に走っている。

掘立柱建物跡と考えられるものは、V層黄灰色中砂層上面にて、東西3間(3.9m)以上、南北1間(1.3m)以上の建物跡が検出されたが、調査区の南側に大きく入り込んでいることから、全容は不明である。

遺物 (第37～41図・図版19・20・24)

遺物は前述した各遺構及び包含層から出土したものである。出土遺物は土師器(杯・甕・土鍋)、須恵器(杯蓋・杯身)、土錐・フイゴ羽口が出土した。

土師器としては杯・甕・土鍋が出土したが杯の出土が目立った。出土位置は(167・168)が4区土壤内から出土したものの、他は3～5区包含層出土である。

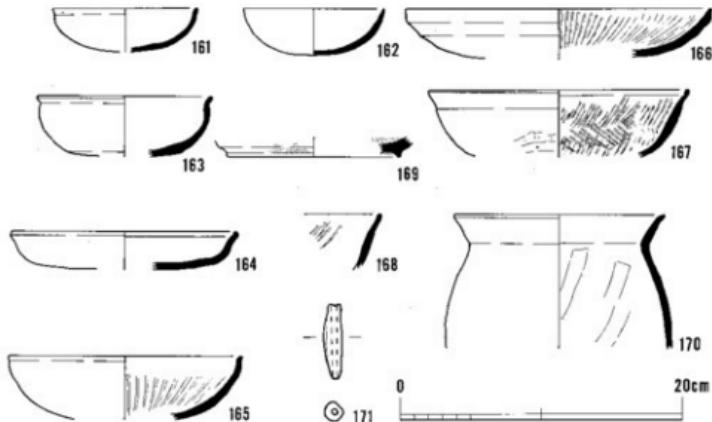
(161・162)は口径10cm程度の小型品で器高も3cm程である。器面調整については、残存状態が不良で、不明な点が多い。(163)は口縁端部が鋭く外反し、丸みのある体部から、やや扁平な底部にいたる小型の杯である。

この種の杯には珍しく底部付近で器壁が厚くなるものである。(164)は口径16cm、器高約3cmの扁平な杯で、口縁端部は玉縁状に肥厚して内側にまきこんでいる。(165・166)は杯の大型品で、底部からゆるやかな彎曲をえがき口縁に至るものである。いずれも内面に放射状暗文が施され、(165)では2本を1単位としている。(167)は口縁が玉縁状に肥厚し、内側にまきこむタイプで、斜方射暗文が部分的に3段みとめられ、それらは交差に施されている。また外面下半部に横方向のヘラケズリがみとめられる唯一の資料である。(168)も内面に暗文が施されたものである。(169)は高台杯であり、内外面に化粧土と思われる赤色物質が塗布されている。(170)はゆるやかに張った胴部から開きぎみの口縁にいたる甕である。内面には斜め方向のヘラケズリが施されている。

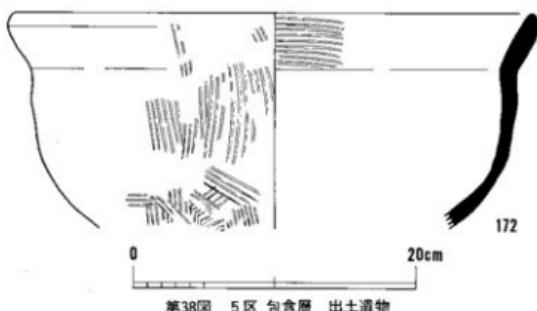
(171)は長さ5.4cm、径1.3cmの土錐である。細みの胴部の中心に径4mmの孔がうかがえる土師質のものである。

(172)は、5区Ⅲ層黄灰色土層中より出土した、土師質の甕もしくは壺形の土器である。底部は欠失し、口縁部から体部にかけても全体の約2/3以上を欠失するが、復元口径は38.0cm、残存器高は15.2cmを測る。体部は内縫気味に立ち上がり、口縁部はやや外方にひらく。

口縁端部は上方につまみあげる。口縁部外面、体部上半には縦方向の、体部下半は斜め方向の粗いハケ調整を加え、口縁部内面には横方向のハケ調整を加える。口縁端部及び頭部は、ナデを行い整形する。



第37図 土壙 5・3~5区包含層 出土遺物



第38図 5区 包含層 出土遺物

年代については、この土器が、遺構に伴わざ包含層より出土したこと、このタイプの土器の類例が周辺遺跡に見られないことなどから明確な時期はおさえられないが、下層より奈良時代の遺物が出土していることなどから他の遺物とは異なり、平安後期頃の時期を漠然と考えている。

フイゴ羽口（179）は3区東端の土壤6から出土したものである。両端や断面についても欠失しており、残存長4.5cm、復元径6.5cm、厚さ2cmで、細緻が混ざり、土師質の土管状を呈するものである。

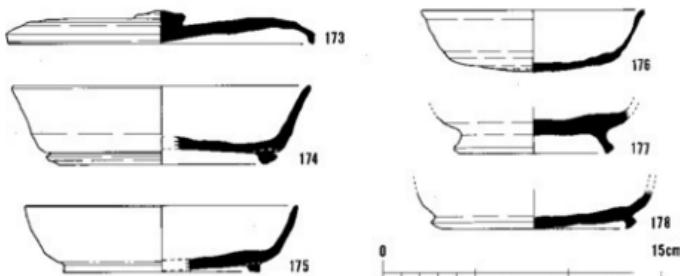
土壤内の伴出遺物から奈良時代のものと考えられる。

須恵器（第39図・図版20）

調査地を覆う、第3層包含層の中から、特に2・4区を中心に、奈良時代頃の遺物が出土している。

杯蓋（173）は中央部がやや突出して、所謂擬宝珠形のつまみを持つ。天井部は扁平で丁寧なハラ削りが施されている。

杯身には高台の付くもの（174・175・178）と付かないもの（176）がある。（175）は高



第39図 2・4区 包含層 出土遺物

台が体部と底部の境界近くに付けられており、端面が外方に向き、下端部のみが踏んばる。(175)は口縁からの屈曲部よりやや内側に、高台の付くものであり、脚端面はほぼ水平で、わずかに外方に踏んばる。

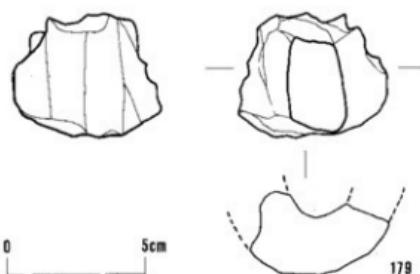
(176)は底部からゆるやかに外反する口縁を持ち、口縁端部は丸く肥厚して終る。底部は回転を利用したヘラ切り未調整である。三田市青野ダム建設に伴う調査で、類似品の出土が知られている。他は高台の破片のみで、詳細は明確でない。

4・6区包含層

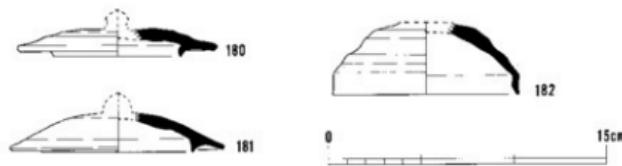
須恵器 (第41図・図版20)

前述の第3層包含層の下層で、4・6区を中心に古墳時代末期の遺物が出土している。3点の杯蓋が出土しているが、蓋と身に於ける、かえりの逆転する前後の形態の両者がある。(182)は逆転前の形態であり、口径10cm、残存高3.8cmを測る。口縁端部は丸くおさめられ、ほぼ垂直に近く立つ。天井部はヘラ切り未調整のままである。

(180・181)は頂部に乳首状のつまみを持つ逆転後の蓋であり、内面のかえりは、口縁端部よりわずかに突出する。天井部の調整は、(180)では丁寧なヘラ削りを施しているが、(181)では施されておらず、天井部頂部に向って丸くなっている。



第40図 土壌6 出土遺物



第41図 4・6区 包含層 出土遺物

第4節 中世の遺構

遺構（第4図・図版2）

中世の遺構としては5・6区のIV層褐色灰色極細砂～細砂、小～中礫混じり上層にて検出された。遺構としては溝状遺構、土壙・柱穴があげられる。いずれも検出された数は少なく決定的な遺物もなかった。

溝状遺構は長さ3.5m以上、幅1.0m深さ15cmで小規模なものである。この溝を切って土壙がある。規模は150×110cm、深さ5cm程度で性格等は不明である。

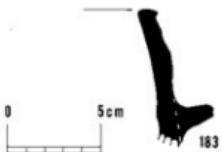
この他、中世と考えられる柱穴が約15ヶ所検出された。いずれも遺構の時期を確定する遺物は出土しなかった。

遺物（第42図）

(183)は須恵質の、羽釜形土器である。口縁部からツバ部分迄の極く一部が残存するのみで口径、器高等などは不明である。粘土紐巻上げによって成形し、ロクロケズリの後、内・外側ともロクロナデ調整を加える。ツバ部の接着部は強くナデる。

須恵質の羽釜形土器については僅かに出土例が見られるものの、類例は極めて少ない。

時期的には、形態からみて、平安後期から鎌倉前期の時期が考えられる。



第42図 5区 包含層 出土遺物

名 称	区	規 模	出 土 造 物	時 期	備 考
豎穴住居跡1	1	5.4m × 4.2m 方形	土師器（壺・甕・高杯・器台・鉢）砾石	庄内期	
* 2	4 ~ 5	9 m × 7 m 方形	土師器（壺・甕・高杯・甕・製塗土器） 土鍤、須恵器（蓋・身・器台） 鉄器（刀子・鍬）石製纺錐車	5. C末 ~ 6. C初	
* 3	6	不 明 方形	土師器（壺・甕・高杯・甕）土鍤 須恵器（身・短頸壺）鉄器、砾石	6. C初	平面確定 せず
掘立柱建物跡1	7	3間 × 3間	須恵器（蓋・身・高杯）砾石	6. C前	
* 2	3	3間 a × 1間 a		8. C	
土 壁1	1	3m × 3.35m 方形	土師器（壺・小型丸底壺・甕）	布留期	
* 2	5	4.3m × 3.3m	土師器（壺・小型丸底壺・甕・鉢・器台） 砾石	布留期	
* 3	5		須恵器（蓋・身・瓶）	6. C後	
* 4	7 ~ 8	3.0m × 1.6m a	土師器（壺・甕・高杯・片口鉢・舟形鉢）	庄内期	
* 5	3 ~ 4	1.4m × 1.0m	土師器（杯）	8. C	
* 6	3	1.6m × 1.3m	土師器（杯）、フイゴ羽口	8. C	
* 7	2				
* 8	5	1.3m × 1.1m		中世	
溝 1	5	幅0.6m、長さ2.5m a	須恵器	6. C	
* 2	6	幅1.0m、長さ5m a		庄内期	
* 3	5	幅1.0m、長さ4m a		中世	
5 層(包含層)	2		土師器（壺・甕・高杯）	布留期	
9 層(*)	3		袋状鉄斧、円板状石製品	古墳時代	
7 層(*)	4		須恵器（蓋・身・壺・甕・高杯）		
4 層(*)	3		土師器（杯）、土鍤	8. C	
4 層(*)	4		土師器（杯・甕）	8. C	
4 層(*)	5		土師器（杯・土鍋）	8 ~ 9. C	
3 層(*)	5		羽釜	中世	

主要遺構・包含層一覧表

第4章 まとめ

1. 桑原遺跡の発掘の結果、縄文・弥生時代末～古墳時代前期から奈良時代・中世における時期の遺構・遺物が検出された。

縄文中期末の深鉢1点が出土したが、摩滅しておらず、さほど遠くない距離からの流入は考えなければならないと考えられるが、この遺跡の下層に存在しないとは断言できない状況である。

弥生末～古墳時代初頭の遺物としては庄内式併行期の遺物がある。竪穴住居跡1や土壙7の遺物が中心であるが、いずれも庄内式そのものではなく、畿内第V様式からの伝統的叩き目手法が主流をなしている。

古墳時代前期の遺物としては布留式土器がある。土壙1や2区5層、土壙2から出土しており、特に土壙2からは器種も豊富で、一括遺物として重要な資料である。

古墳時代中期～後期のものは竪穴住居跡2・3、掘立柱建物跡1、土壙2や包含層から遺物が出土しており、いずれも土師器と須恵器の共伴関係を考えうるうえで興味ある遺物であるが、若干遺物量が少ない。

奈良時代の遺構は掘立柱建物跡2がある他、柱穴、土壙が検出された。遺物の内に遺存状態はよくないが、精良な胎土で焼成された土師器が出土し、杯内面には放射状の暗文が見受けられた。三田盆地では珍しい遺物である。

中世の遺構は溝・土壙・柱穴が若干検出されたもので、遺物も極く僅かであり、中世遺構の外辺にあたる所かも知れない。

いずれの時期の遺構も、調査範囲の制約もあり、その分布などまったく不明と言わざるを得ない。

2. 桑原遺跡の発掘において前述の成果があったわけだが、武庫川流域に形成された自然堤防上の遺跡としては、ほとんど不明で、しかも、微高地が埋没しているという条件から、発見が遅れている。いずれにせよ、この沖積地の微高地に庄内式併行期から中世に至るまでの間、生活の跡がたどれるが、三田盆地内での中枢をなす遺跡というよりは中・小規模な集落が営まれたことが推定される。

3. 今回の発掘も、数片の土器を採集した分布調査に端を発したものであった。今まで遺跡の存在は若干予想されていたものの、形になって現れた時は、感慨深くさせられたものであった。

今回の発掘により武庫川流域やその支流域の沖積地では小規模な遺跡はもちろんのこと、この地中核をなす遺跡の発見、発掘が当然予想され、洪積地上の遺跡からの情報量をはるかに上回るもののが発見されよう。

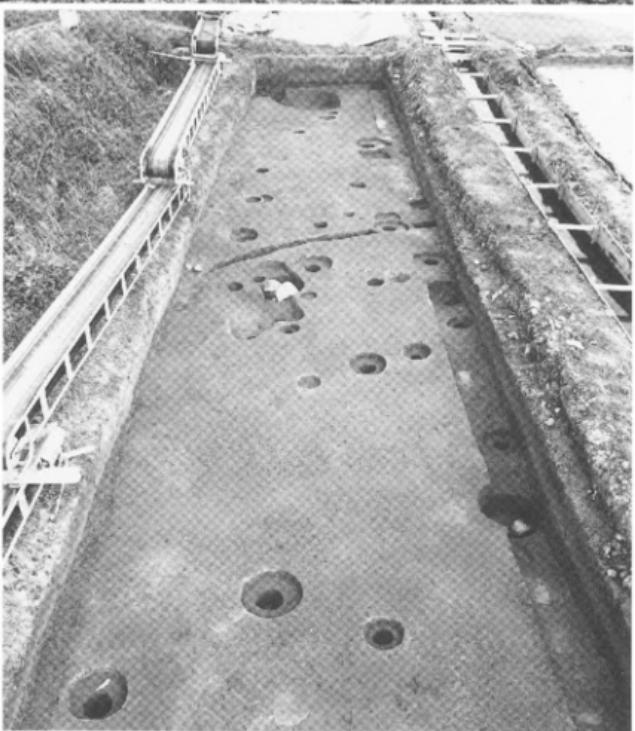


1. 遺跡遠景(西方より)

2. 調査地点航空写真



1.



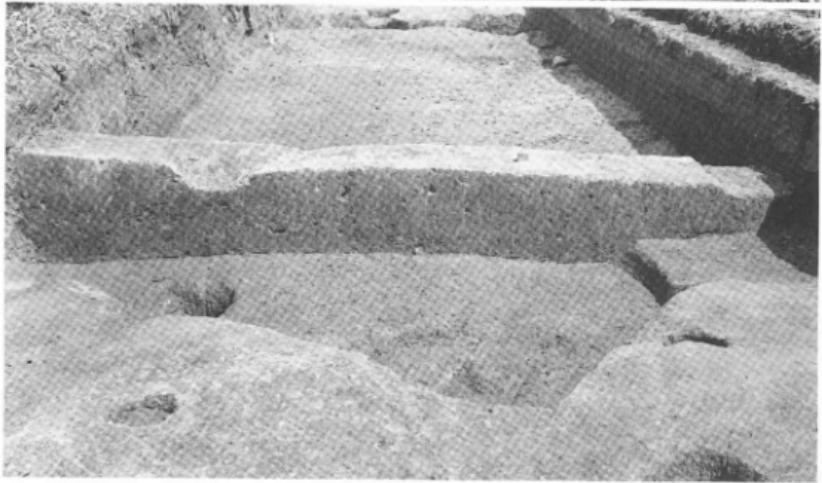
2.

1. 5区 中世遺構(南から)

2. 3・4区 奈良時代遺構(西から)



1.



1. 竪穴住居跡2 全景(東から)

2. 竪穴住居跡2 断面(西から)



1. 土壌2・3 全景(南から)



2. 土壌2 土器出土状態



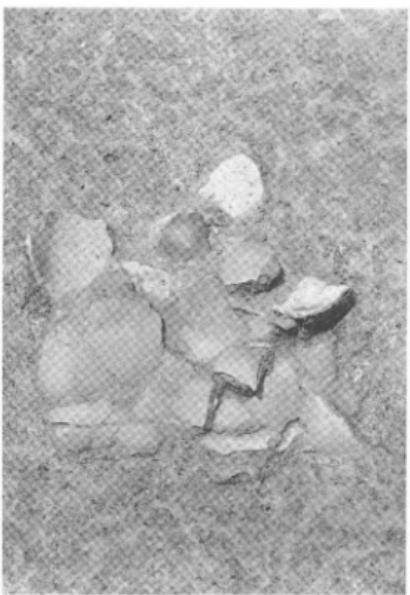
1. 土壤2 土師器128



2. 堅穴住居跡3 須惠器76



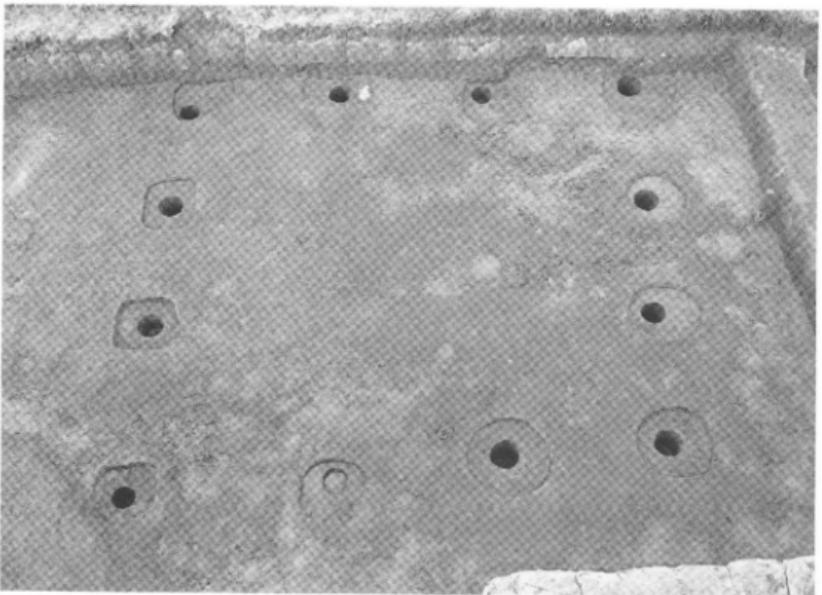
3. 堅穴住居跡3 土師器71



4. 堅穴住居跡3 土師器70



1. 竪穴住居跡3 全景(南から)



2. 掘立柱建物跡1 全景(南から)



1.



2.

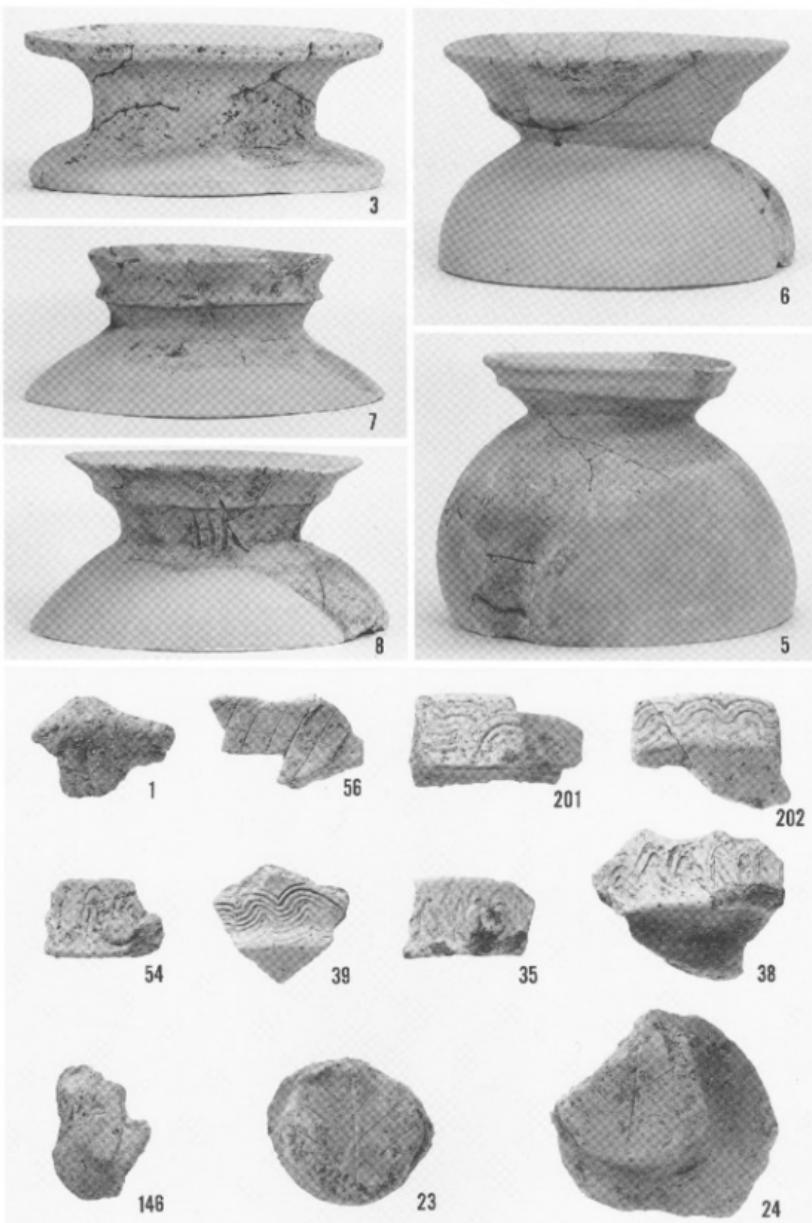
1. 穹穴住居跡1 全景(北から)
2. 穹穴住居跡1 鉢・砥石出土状態



1.



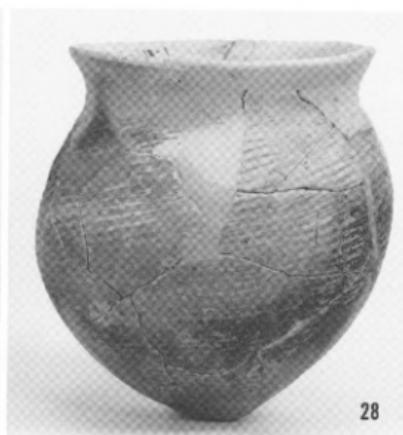
1. 調査後全景(東から)
2. 調査後全景(西から)



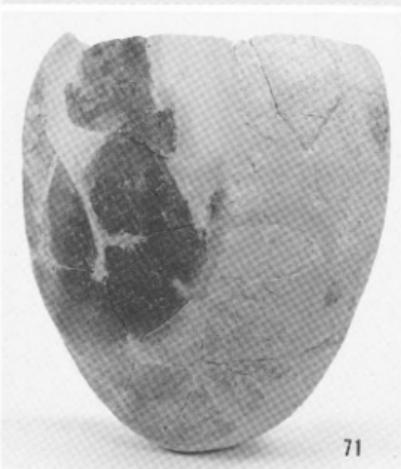
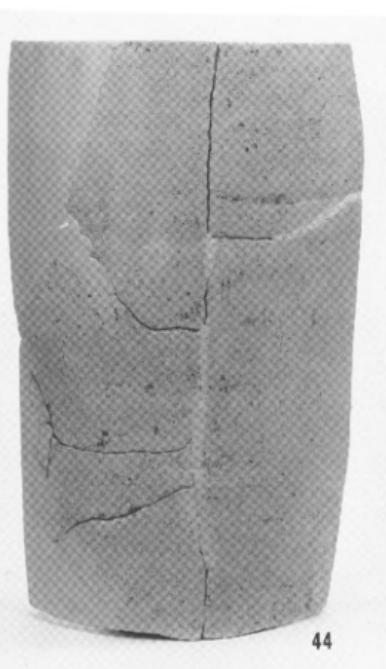
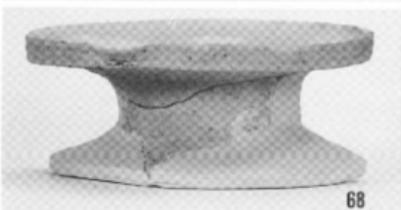
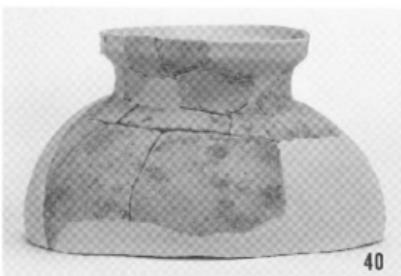
縄文土器(1) 堅穴住居跡1・2



堅穴住居跡 1



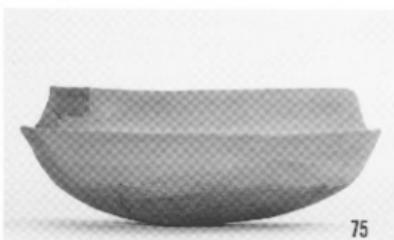
堅穴住居跡 1



堅穴住居跡2・3 5区柱穴



61



75



62



76

1. 堅穴住居跡2・3



107



115



108



116



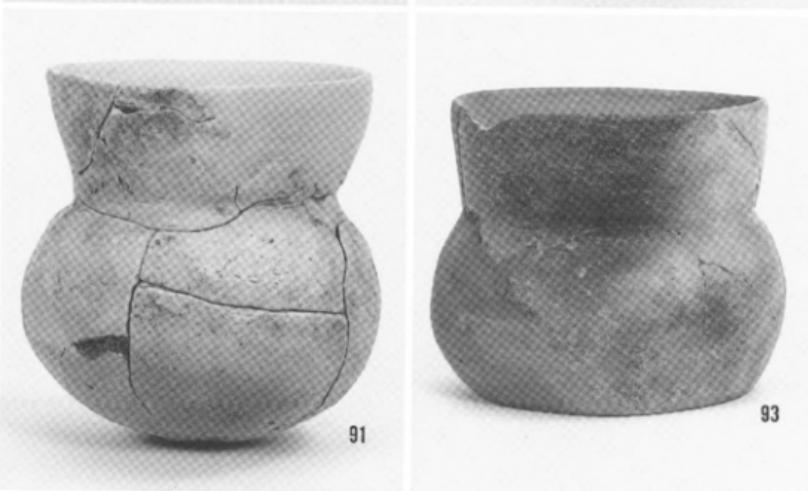
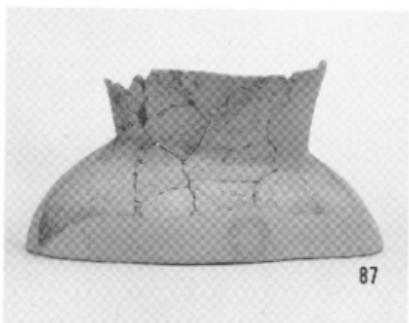
110



118

2. 4~6区包含層

図版一四 土師器



土壤1および2区包含層

圖版一五 土師器



2區包含層

圖版一六
土師器



137



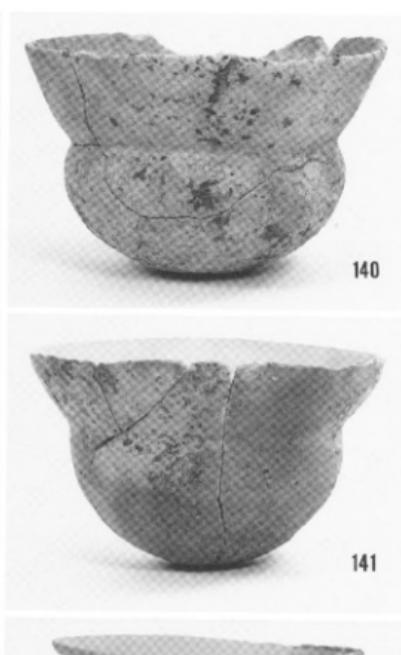
140



141



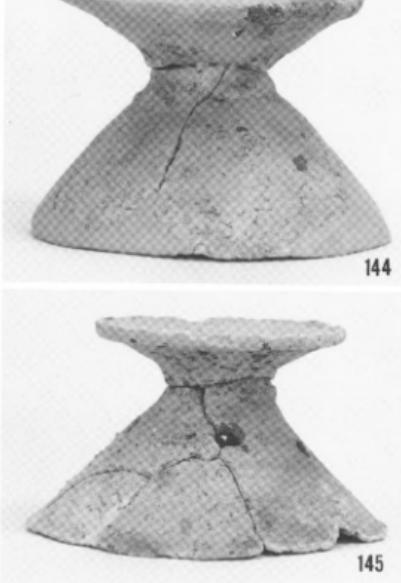
143



144



133



145

土壤2

圖版一七 土篩器



128



124



126



129

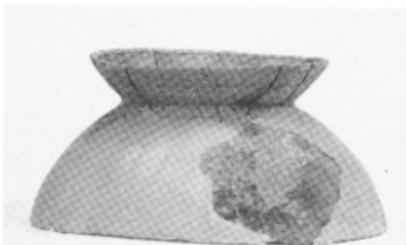


134

土壤2



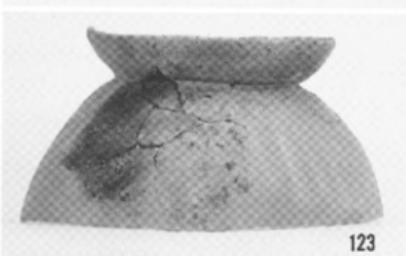
131



127



156



123



152

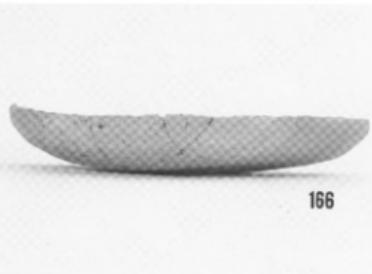


154

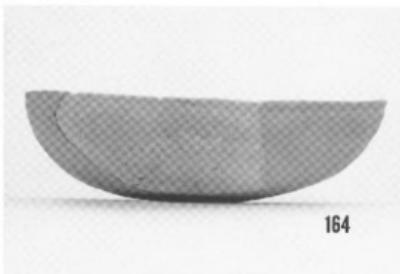


159

-



166



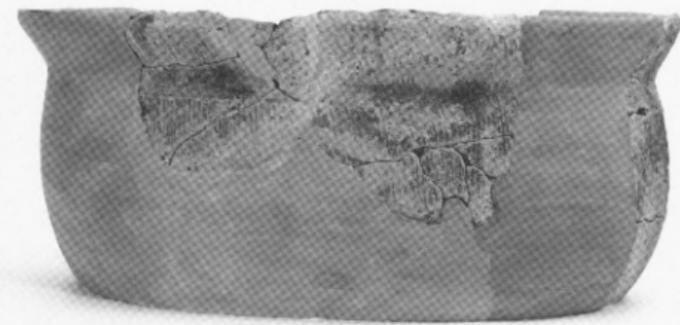
164



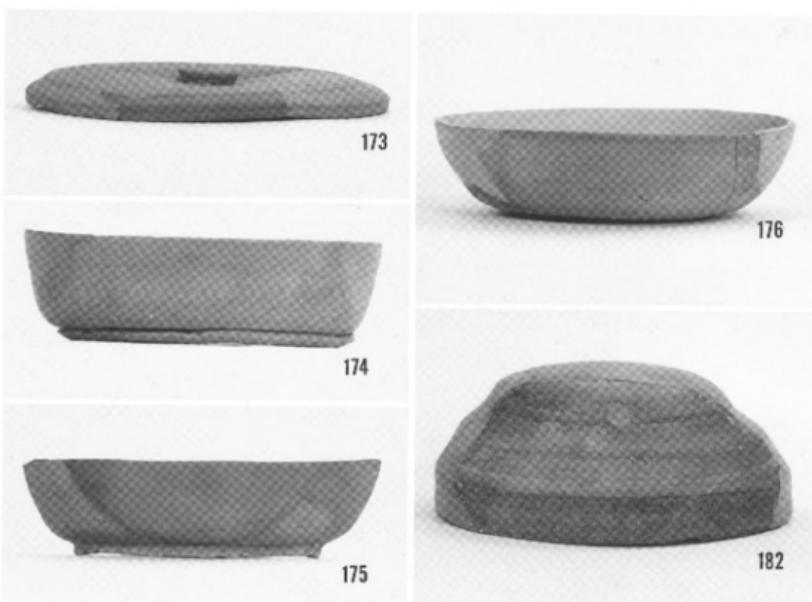
167



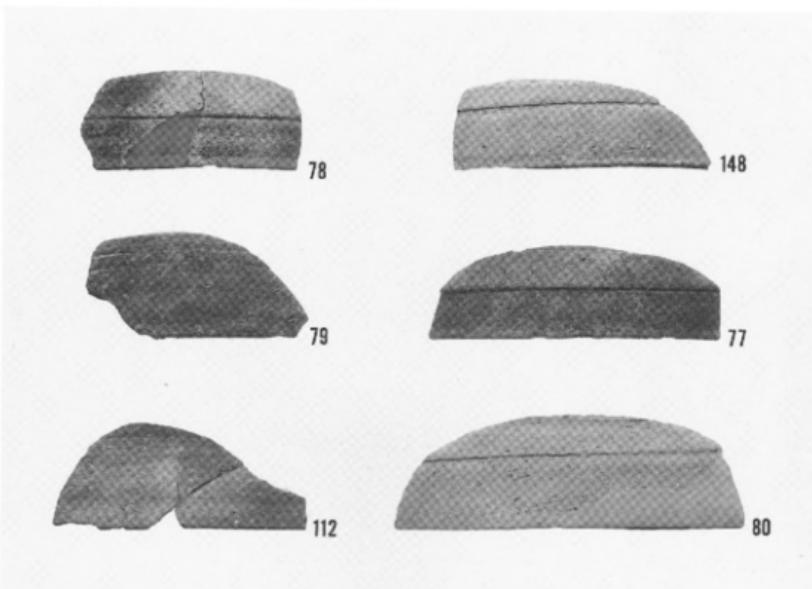
168



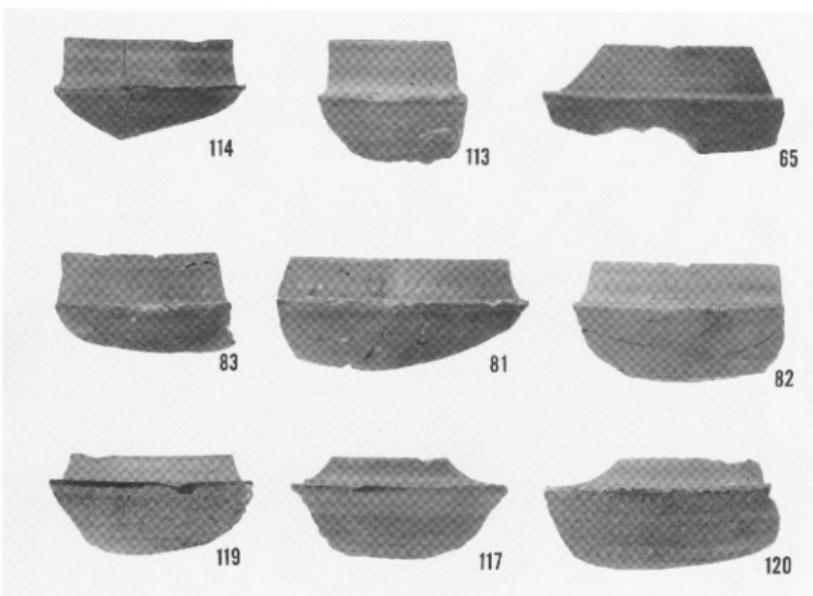
172



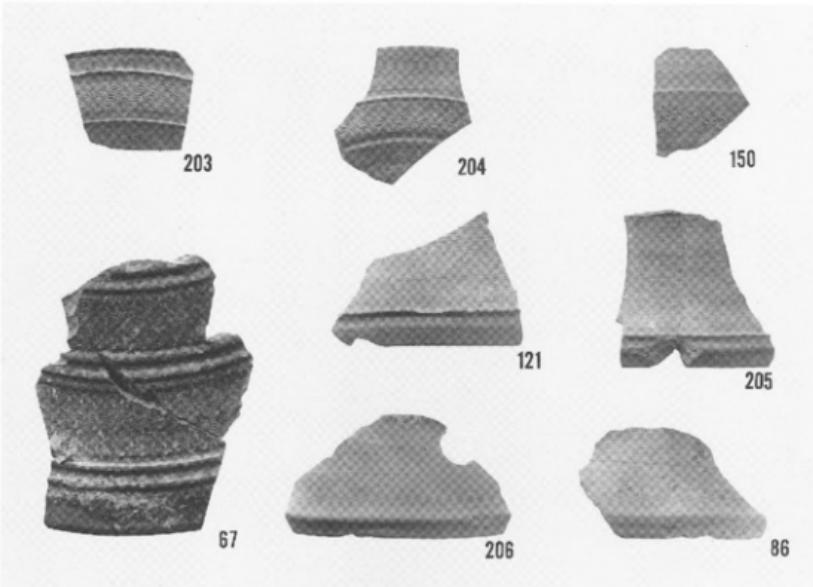
1. 2·4·6区 包含層



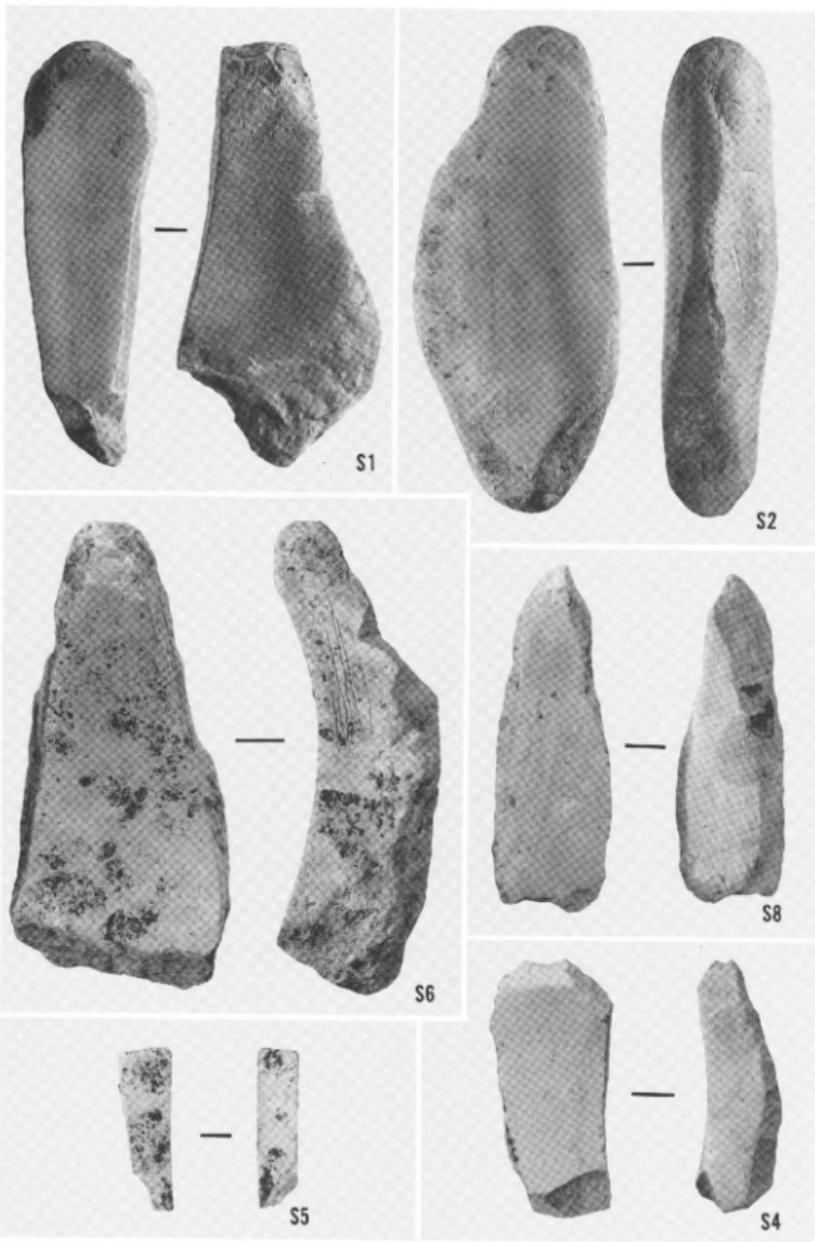
2. 杯蓋(各地区)



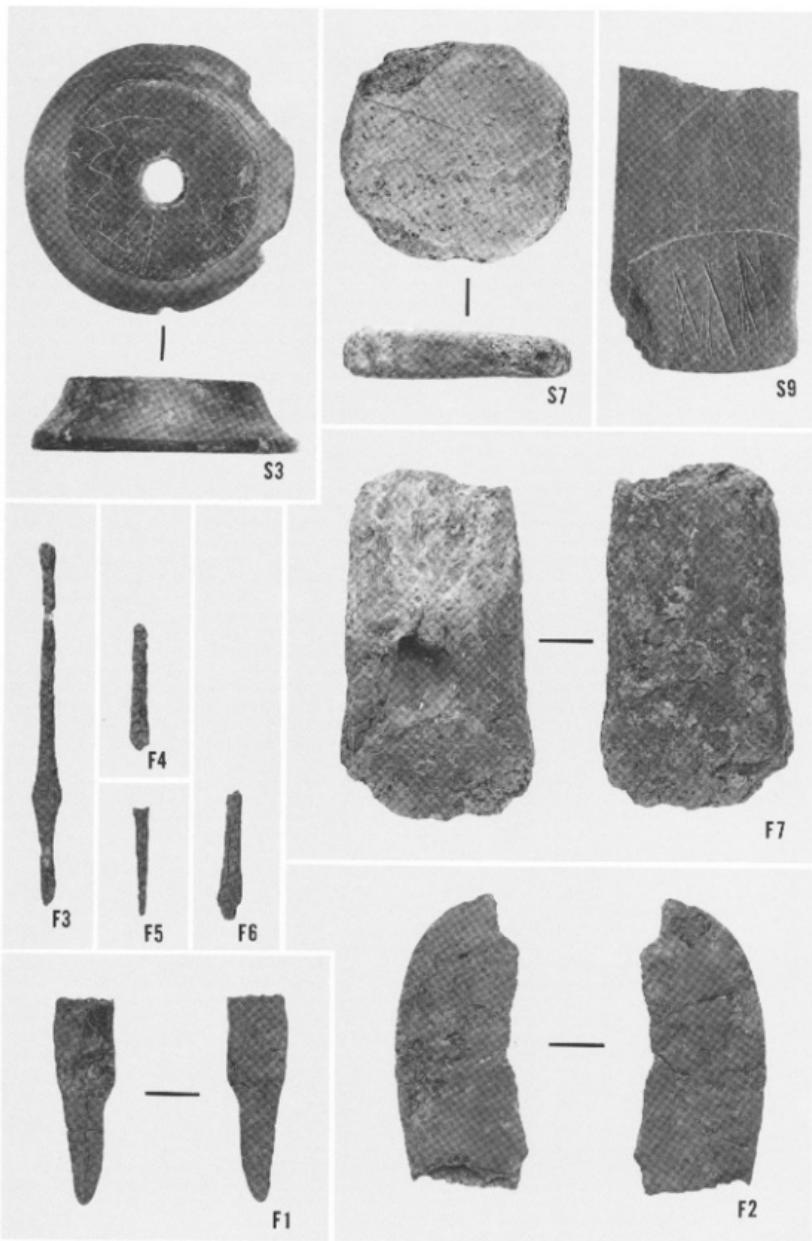
1. 杯身(各地区)



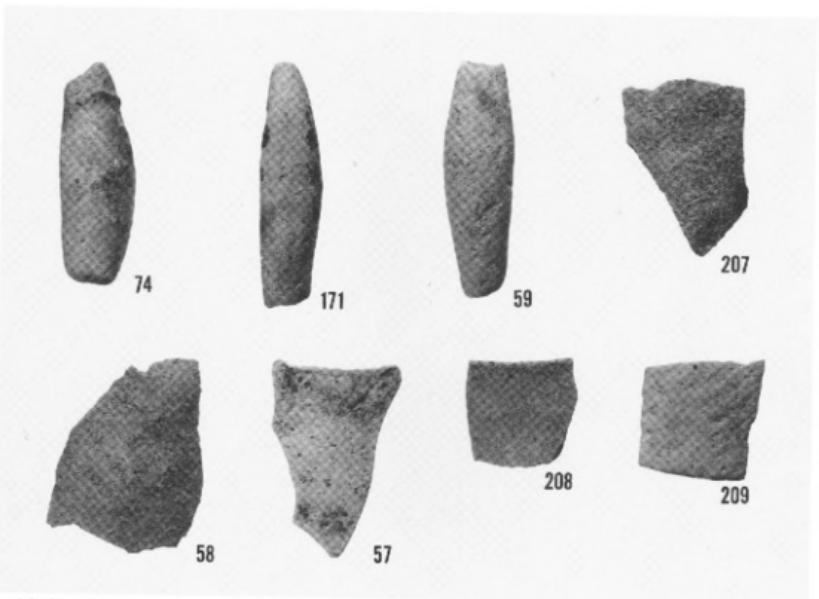
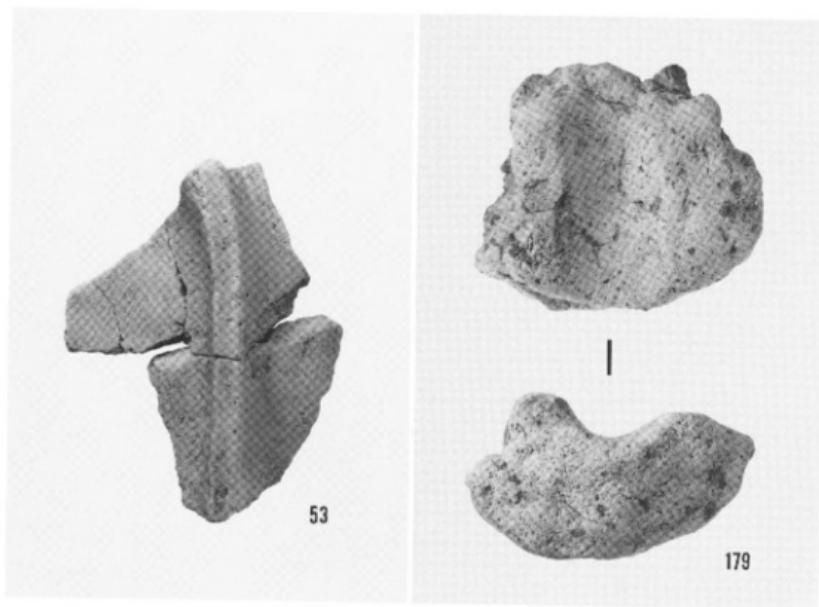
2. 高杯・器台(各地区)



砾石



石製品・鉄製品



土師器・土製品

兵庫県文化財調査報告書 第37冊

桑原遺跡

—国鉄福知山線複線電化工事に伴う発掘調査—

発行日 1986年12月

編集 兵庫県教育委員会

印刷(株)関西広済堂神戸支店

〒650 神戸市中央区北長狭通6丁目3-3

TEL 078 (341) 4912
